

愛知県北設楽郡 東栄町のまちづくり

2021 年度名古屋市立大学大学院人間文化研究科「人間文化研究 F」
／人文社会学部「国内フィールドワーク B」実習報告書

榎木美樹編

2022 年 3 月

東栄町観光マップ



愛知県東栄町の観光サイト東栄のじかん 公式MAP <https://www.toeinavi.jp/maps/>

現地滞在日程（2021年11月12日～14日）

日にち	活動	参加者
11月12日 (金)	10:00 JR 東栄駅集合。 午前中 各自の希望や関心に基づいて町内視察。 13:00～14:50 東栄町役場訪問。 尾崎あゆみさん（東栄町役場振興課）による東栄町の概況説明と懇談会 15:00～ 各自の希望や関心に基づいて町内視察。	石井 杉山 轡田 野口 三品 山田 吉田 榎木
11月13日 (土)	日中 各自の希望や関心に基づいて町内視察。 17:00 体験型ゲストハウス danon に集合。 金城愛さん（danon オーナー）へのインタビュー 訪問で得たことの共有とまとめ 20:00～22:00 伊藤拓真さん（観光まちづくり協会）へのインタビュー	吉野（朝到着） 石井（夕方迄） 杉山 轡田 野口 三品 山田 吉田 榎木
11月14日 (日)	・朝食後、各自の希望や関心に基づいて町内視察。 → 午後、JR 東栄駅で解散。	杉山 轡田 野口 三品 山田 吉野 吉田 榎木

* 宿泊は、各自で確保。13日（土）は、体験型ゲストハウス danon に宿泊。

目次

はじめに	1
花祭のじかん（吉田祐治）	4
東栄町における林業と職（吉野大志）	11
花祭りの現状と今後の取り組み（轡田ゆうか）	16
東栄町 FW 研究レポート（野口美有）	22
東栄町 FW から考える特定地域づくり事業協同組合に対する主観（三品美咲）	27
東栄町における移住者とまちづくりの関係（山田輝子）	38
愛知県東栄町における「移住ソムリエ」制度の現状と課題（杉山斗優子）	44
「自然」「地縁」という東栄町の豊かさは子育てにいかされているのか（石井友香）	51
資料	66

はじめに

本報告書は、2021 年度後期に開講された、名古屋市立大学人間文化研究科「人間文化研究 F」および同人文社会学部「国内フィールドワーク B」の成果報告書である。

【経緯】

名古屋市立大学人間文化研究科・人文社会学部が実施する複数の研修やフィールドワーク系科目は、2019 年から引き続きコロナ禍の影響で中止や延期を余儀なくされて 2 年が経とうとしている。なかなか収束しないコロナ禍ではあるが、「できないことよりできることに目を向けよう」と、2021 年度は可能な形態の研修の実施を計画した。海外渡航は全く見通しが立たないので、国内で、しかも同一県内であれば、緊急事態宣言下でもフィールドワークの実施が可能であろうと、愛知県内で実施可能地を探索した。研修のテーマは、住民や NGO が中心になって取り組むまちづくりに焦点をあて、地域の伝統を守りながらもよそ者を受け入れて進行・拡大する地域づくりのありかたについて学ぶことができるころがいいと考えたところ、愛知県北設楽郡東栄町が思い浮かんだ。

東栄町は、国指定の重要無形民俗文化財である花神楽（花祭）¹の開催地として有名だ。花祭は、奥三河地区で毎年 11 月から 3 月にかけて各地区で開催される。今日まで 700 年以上続く伝統芸能で、「悪霊を払い除け、神人和合、五穀豊穰、無病息災を祈る目的で鎌倉時代から代々親から子、子から孫へと大切に伝承された来た神事」とある（東栄町ホームページ「花祭 HA・NA・MA・TSU・RI」より）。この花祭に関しては、民俗学や文化研究の観点から日本全国の大学や研究者が多数調査していると聞き及んでいた。伝統芸能が今も息づくということは、ここには人がいて、地域に根づいた活動が今もあるということだ。今般の総務省の取組として話題に上る、地域創生や地域づくりの観点から東栄町をみると何が見えてくるのだろうか。この好奇心から、東栄町でのフィールドワークを決定した。名古屋で「東栄町」という名を出せば、必ずこの花祭が引き合いに出され、「奇祭で有名」「中毒性がある面白い」「また行きたい」といった言葉が続く。

他方で懸念もあった。名古屋市立大学人文社会学部所属の 89%の学生²は愛知県と東海三県（岐阜、三重、静岡）出身で、自宅生が多く、居住圏に類似する地方都市へのフィールドワークにどれほど興味を持ち調査意欲を湧かせるのか見当がつかなかった。おそらく、花祭ほど有名な行事であれば、家族旅行や社会見学ですで行ったことがあって、わざわざ「調べる」対象にしないのではないかと、言葉や風習が類似する地域にそれほど興味を示さないのではないかと、との危惧があった。

研修説明会を 9 月下旬に実施したところ、15 名ほどの申込者があった。この間にも大都市圏にコロナ禍対策として緊急事態宣言が発令され、愛知県でも同宣言が延長されたことから、現地調査は現地踏査型にするのかオンラインフィールドワークにするのか二転三転することとなった。最終的に、現地踏査型での実施と決定し、登録者は 7 名（大学院生 1 名と学部生 6 名）になった。

¹ 昭和 51（1976）年指定。

² 名古屋市立大学の 7 学部全体では 81%の学生が愛知県と東海三県（岐阜、三重、静岡）出身である [名古屋市大 HP「学生データ」 <https://www.nagoya-cu.ac.jp/about/profile/data/student/>]

東栄町でのフィールドワークを11月12日～14日に設定し、ここに向けて学習を開始した。10月・11月の座学では、日本における地方創生の取組みを学び、東栄町の総合戦略についてはゲスト講師・丹羽貴裕さん³のレクチャーを受けた。また、質的調査を軸としたフィールドワークの技法についても学習し調査に臨んだ。

【東栄町】

東栄町は、愛知県の東部、静岡県と県境を接する山間地に位置し、町域の約90%が山林原野で、標高700m～1000mの山々が連なっている。人口は2,990人(令和3年4月1日現在:東栄町ホームページ「住民基本台帳」)で、人口の増減率は2～4%、高齢化率は50%程度、現在も毎年90人程度の人口減少が続いており、過疎地域自立促進特別措置法による過疎地域の指定も受けている。主な産業は、林業、農業だが、木材価格の低迷や担い手の高齢化等により衰退傾向にある[東栄町ホームページ「東栄町要覧2020」]。

花祭を報じる賑わいや熱狂に比して、地方都市としての東栄町は、少子高齢化で先細っていく地方自治体の一つように見える。実際、2014年に東栄町は「消滅可能性都市」として、愛知県新城市の他の5地域とともにリストアップされた⁴。子どもを産む世代が半減することで、未来の人口が減り、行政の維持が難しくなるとの試算をもとに選定されたものである。少子高齢化は日本全体の課題だが、継続的な人口減少で自治体の存続危機が危ぶまれる事態にあると言われるのが、リストアップされた市町村だ。

【フィールドワーク開始!】

名古屋から東栄町まで公共交通機関で移動するには、名鉄名古屋本線とJR飯田線を乗り継ぐ。名市大の名鉄線最寄り駅の金山から東栄駅(JR飯田線)までは片道3時間を要する。東栄駅の次の駅(出馬駅〔いずんまえき〕)は静岡県浜松市天竜区に立地する。東栄町は愛知県の東端に位置する。

無人の東栄駅の駅舎は花祭に使用される鬼の面をモチーフにした「鬼面駅舎」で、そこを降りてすぐ正面には、花祭りの鬼の像が原寸大で2体いる。花祭や鬼がこの地域のアピールなのだとすぐにわかる。

折しもの2020年からのアニメ「鬼滅の刃」ブームもあって、鬼が登場するこの花祭は「鬼滅旋風」に便乗して宣伝しているのかと思いきや、花祭では「鬼の舞」が一番盛り上がり、大地に新しい活力を吹き込み、五穀豊穰、無病息災をもたらす鬼を大切にしているので、「滅する」流れには乗らないとのこと。なるほど、伝統祭祀を理解し愛する地元民の至極まっとうな言葉だと受け止めた(2021年11月東栄町にて聞き取り)。

東栄駅から町の中心部へ移動する7kmほどを車両移動する際のすれ違う対向車両の数、町役場や商店街周辺の様子をみても、ここが「消滅可能性都市」に列記されているとはにわかには信じがたい。むしろ

³ 愛知県庁の職員で、2016～2019年には東栄町役場に出向されていた人物。

⁴ 2014年5月、有識者で構成された日本創成会議が「消滅可能性都市」という考え方を打ち出し、「2040年の消滅可能性都市は896の自治体に及ぶ」と発表した(日本創成会議とは、東日本大震災からの復興を新しい国づくりの契機にしたいとして、2011年5月に発足した民間の政策発信組織)。愛知県では新城市・南知多町(知多郡)・美浜町(知多郡)・設楽町(北設楽郡)・東栄町(北設楽郡)・豊根村(北設楽郡)と飛島村(海部郡)の6地域が消滅可能性都市と発表された。消滅可能性都市とは、現状で推移すると20歳から39歳の女性が2040年までに50%以上減少すると予想される地域のこと、その結果として自治体が消滅するとされている。

ろその明るい雰囲気には活気があるとさえ思えてくる。これが「にぎやかそ」なのか。

さあ、ここからわれわれのフィールドワークが始まる。学生各人は、どのような東栄町をみたのだろうか。



図表 1 8 交通事情の変化 ・三遠南信自動車道は、平成 24 年(2012 年)3月に「鳳来峡 IC-浜松いなさ北 IC」間が、同年4月に「浜松いなさ北 IC-浜松いなさ JCT」間が開通し、浜松市や東名・新東名高速道路へのアクセスが著しく向上した。 ・平成 31 年(2019 年)3月の「東栄 IC-佐久間川合 IC」間の開通に伴い、来訪客の増加や客層の変化を感じる事業者もいる。

〔第 2 期東栄町人口ビジョン (2020~2024 年度) : 10〕

本訪問では、町役場の尾崎あゆみさん(東栄町役場振興課)、伊藤拓真さん(観光まちづくり協会)、金城愛さん(体験型ゲストハウス danon オーナー)には、特にお世話になった。厚く御礼申し上げたい。その他、学生が面会約束を取りつけて訪問したり、アポイントメントなしの突撃訪問をしての聞き取りに快く応じてくださった東栄町の方々にも、この場を借りてご厚情に感謝申し上げます。また本訪問の現地調整は、名古屋市に拠点を置く合同会社まちプロデュースが行ってくれた。名古屋の椎葉美耶子さん、東栄町側で調整をしてくださった永吉慶一さんにも記して感謝申し上げます次第である。

2022 年 1 月 29 日

榎木美樹

参考文献

第 2 期東栄町人口ビジョン (2020.03)

第 2 期東栄町まち・ひと・しごと創生総合戦略 (2014.12)

大野晃 (2008) 『限界集落と地域再生』 信濃毎日新聞社

岡崎昌之編 (2014) 『地域は消えない：コミュニティ再生の現場から』 日本経済評論社

小田切徳美 (2014) 『農山村は消滅しない』 岩波新書

小田切徳美・尾原浩子 (2018) 『農山村からの地域創生』 筑摩書房

増田寛也編著 (2014) 『地方消滅』 中公新書

山下祐介 (2012) 『限界集落の真実：過疎の村は消えるのか』 ちくま新書

名古屋市立大学ホームページ「学生データ」(<https://www.nagoya-cu.ac.jp/about/profile/data/student/>)

1 はじめに

東栄町は、愛知県の北東部に位置し、静岡県西端に接する山あいの小さな町である。木曾山系の南端に位置し、天竜水系の大千瀬川が町の中心部を流れ、豊かな自然環境に恵まれている（木曾町勢要覧資料編 2016）。抜けるように青い空が広がり、鳥の囀りや川のせせらぎが耳を楽しませる。

日常の喧噪から遠く離れ、ゆっくりと過ぎる時間に身を浸してみる。都会とは異なる時間の流れが心地よく、初めは戸惑いを覚えつつも、フィールドワークが終わる頃には離れたい魅力を感じていることに気づく。東栄町の観光情報を紹介するウェブサイト（東栄町観光まちづくり協会）のタイトルは、ずばり「東栄町のじかん」だ。制作を担当した職員は町外から移り住んだ1ターン移住者だったそうだが、同じように時間の質の違いに気づき魅了されたことが想像され、微笑ましい気持ちになる。

東栄町で最もよく知られるのは、国の重要無形民俗文化財に指定される「花祭」だ。冬の訪れとともに東栄町の各地区は鬼を迎え、太陽と大地の生命力を呼び醒ます。約700年にわたって受け継がれる山里の奇祭で、全国的にもよく知られている。新型コロナウイルスの影響でここ2年は中止されているが、東栄町の人々にとって花祭が特別な存在であることは、町の風景や人々の会話から感じとることができた。年に一度の神事芸能は、地域の生活に欠かせないものであり、暮らしのなかに溶け込んでいる。

フィールドワークで花祭について話を聞くうちに、その語りのなかに時間性を帯びた言葉が多く含まれることに気がついた。長い歴史を有するからこそ時間の連続性が強く意識されるのかも知れないが、花祭において継起する時間は「直線的な長さ」だけではないように感じられる。花祭は、「時計」に代表されるような均質で数量化された時間とは異なる豊穡な時間性を有しているのではないか。本稿では、花祭に関する先行研究や時間理論を参照しつつ、花祭に包含される多様な時間観念の素描を試み、文化と時間の関係性について考えてみたい。

2 花祭とは

天竜川中流域の奥三河、北遠、南信濃では、かつては陰暦霜月、現在は11月を中心として湯立神楽を中心とする奇祭が行われてきた。このうち東栄町・豊根村・津具村（設楽町）に伝わるものは「花祭」と呼ばれ、全17地区（東栄町：11地区、豊根村：5地区、津具村：1地区）で継承されている。真言密教に神祇信仰が加わった両部神道と庶民信仰が習合したものであり、山岳修業を行いつつ諸国を渡り歩いた修験者の影響が指摘されている（東栄町誌「伝統芸能編」2003）。

花祭では、舞庭の中心に湯釜が据えられ、天井から依代となる白蓋・湯蓋が吊るされる。舞庭を取り囲むように「ざげち（切り絵）」で飾られた注連縄が張り巡らされ、花宿は神聖な場所となる。花祭の構成は、大きく分けて「神勧請」「舞」「湯立て」「神返し」に区分され（東栄町誌「伝統芸能編」2003）、代表的な流れは別表1のとおりである。花宿に迎えた神仏を前に、鬼の舞をはじめとする舞が奉納され、中心となる神事「湯立て」において祭りは大詰めを迎える。

花祭には「花の舞」「鬼の舞」「三ツ舞」「四ツ舞」「湯ばやし」など多様な舞があり、これらの舞が夜を徹してかわるがわる繰り広げられる。太鼓のリズムに合わせて反芻される「てーほへ、てほへ」のかけ声や笛の音色、ほろ酔のセイト衆による野次、躍動感あふ



花祭の主役「禰鬼」

（東栄町観光まちづくり協会ウェブサイトより）

1	神迎え	滝祓い、湯立てなど。 神々を舞庭にお迎えする。
2	舞始め	楽の舞、市の舞、地固めなど。 舞庭を清める。
3	舞	花の舞、三ツ舞、四ツ舞など。
4	鬼	山見鬼、禰鬼、朝鬼など。 五穀豊穡、無病息災をもたらす。
5	湯ばやし	湯たぶさをもって舞い、釜の湯を振りかける。
6	神送り	神々を鎮め、元の場所へ送る。

別表1 花祭の代表的な流れ（花祭展より）

れる舞などが混然一体となって会場に満ち、花宿は徐々に熱気を帯びていく。こうして「寒い・眠い・煙い」の3拍子揃うとも言われる過酷な「3むい祭」(東栄町観光まちづくり協会ウェブサイト)は、忘れがたい経験となって多くの参加者の心に刻まれるのだろう。

3 花祭をめぐる語り

今回のフィールドワークは、東栄町の人々が花祭に対して抱く想いや熱意を改めて実感する機会となった。中でも印象的だった2つの事例について、現地での観察やヒアリングした内容をもとに記述していきたい。

3-1 「和太鼓 志多ら」と「NPO法人てほへ」

和太鼓志多ら(以下「志多ら」という)は、東栄町を拠点に活動するプロの演奏家集団である。1990年代前半に東栄町に移住しており、楽団員約20名のほぼ全員がIターン移住者である。志多らが移住を決めた最も大きな理由は、練習場所の確保だった。都心部では大きな音が鳴る太鼓の練習場を確保するのは困難であり、公営の文化施設等を借りるたびに使用料が必要となる。心置きなく太鼓を叩くことができる環境として東栄町は最適であり、団員の一人が東栄町出身だったことや、自由に使用できる廃校があったことがきっかけとなって移住を決めたようだ。当時、都会から地方へ移住する若者はまだ珍しい存在だったが、音楽活動で培われた礼儀正しさ(大きな声で挨拶するなど)も手伝って、次第に町民との距離が縮まっていた。

当初はあくまで演奏活動に没頭できる環境を求めていただけだったが、本業(演奏活動)での行き詰まりなども契機となり、志多らは次第に地域活動への関心を高めていく。地域の清掃活動や消防団などから始まり、やがて花祭との関わりも深めていくことになった。人口減少や少子高齢化のなか各地の農村芸能が存続の危機に立たされているが、東栄町の花祭も例外ではない。東栄町に根付いた志多らの若者たちは、やがて結婚し、出産し、花祭を支える存在へと変わっていった。当初は「花祭によそ者を関わらせるなんて…」という声も多数あったようだが、地域の人々の理解も進み、若者たちは次第に花祭に欠かせない存在になっていった。地域の住民と移住者は相互に受け入れあいながら、時代の移り変わりにあわせて祭りの在り方を変化させていったのだろう。

地道に活動を継続した志多らは活動の幅を広げ、2010年には文化を通じたまちづくり活動の受け皿として「NPO法人てほへ(以下「てほへ」という)」を設立する。2015年から「てほへ」は、廃校となった旧東部小学校をリニューアルして活用する「東栄町体験交流館 のき山学校」の指定管理業務を受託している。「のき山学校」は地域内外の交流促進や観光振興を目的とした町営の施設で、図書館やカフェのほか「東栄町観光まちづくり協会」や「地域おこし協力隊 燈栄隊」の活動拠点ともなっている(てほへウェブサイト)。

複合的な事業を展開する「志多ら」と「てほへ」ではあるが、地域の子どもたちを対象とした事業に力点を置いていることが印象的だった。「東栄で自分らしく暮らすお話し会」では、奥三河地域で活躍する移住者や若者を招き、小中学生や町の人々が体験談を聞くことができる場がつけられる。また、『和太鼓「絆」交流プロジェクト』では、県内の高校和太鼓部と志多らが合同で練習・演奏するとともに、町内の子どもたちと交流する機会が設けられる。いずれの事業でも町内の子どもたちを対象として、深く心に残る経験や町への愛着を育むことが企図されており、Uターンも含めて次世代のまちづくりの担い手を育成することが意識されている。移住・定住に関する政策が注目されるなか、地域のなかで大人が率先して子どもたちの学びや体験の機会を創出し、まちへの愛着を育み、将来へと繋げていく視点は意外な盲点なのかもしれない。「東栄町の子どもたちはみんな東栄町のことが大好きなんです」という言葉が、とても印象に残った。



花祭で活躍するIターン者の子どもたち
(全国町村会ウェブサイトより)

3-2 「花祭展—花祭のある暮らし—」と「花祭部」

新型コロナウイルスの影響によって、2年連続で東栄町内の全地区の花祭が中止となった。本来の花祭が開催できないなか、改めて花祭のある暮らしについて考えることを目的として、約2ヶ月間にわたって行われた展示がこの「花祭展」である。

各地区の花祭の紹介や、使われる道具の展示、準備風景などの祭りの裏側、祭りに関わる人々の声などが展示され、東栄町の暮らしの中に息づく花祭を多面的に知ることができる。展示の主催者は、「花祭部」と称する20～40代の若者で構成される団体だ。花祭の担い手不足に悩む地区が多いなか、地区の垣根を超えた横のつながりづくりや、多様な担い手のコミュニティを醸成することを狙いとしている。花祭を継承していくうえでは、資料に明文化されない不可視の部分も多いという。主要な担い手が高齢化するなか、現場から零れ落ちてしまいがちな小さな課題へも目を向けつつ、多様な連携によって持続可能な祭りのあり方を模索しようとしている。

今回の展示では、花祭に関わる町の人々の想いをあらためて可視化し、共有することに主眼が置かれていた。花祭とともに生きてきた人々の言葉には温度感がありいずれも心に残ったが、中でも印象的だったものを下記に抜粋したい。



「花祭展 —花祭のある暮らし—」チラシ

物心ついた頃には、父親が榊鬼を舞っていました。大きな鉞を持ち、迫力のある面をつけて、大勢の人の前で堂々と鬼を舞う姿に、自然と憧れの気持ちを持つようになりました。自分も大きくなったら、同じ鬼を舞いたい。そんな思いを持っていた子どもの頃、周りが心配するくらい薄着（半袖・短パン）で、ガタガタ震えながらも、父親の舞う姿をずっとずっと見ていたのを覚えています。小学生になり、初めて本番で子鬼として、父親と一緒に舞うことになりました。当時は、夕方から翌朝にかけて花祭が行われていたので、榊鬼が登場するのは、普段ならとっくに寝ている深夜。そんな時間でも、一緒に舞えることにワクワクし、絶対に最後まで舞いきるんだと意気込んでいました。父親が持つ鉞よりもずっと小さい鉞をもち、父親が付けている面よりもずっとずっと小さい面をつけていても、気持ちだけは強くて「かっこいい鬼様だ」と思い、必死で父親の舞う姿を真似したことを覚えています。

(中 略)

それからは、毎年、子鬼として舞うようになり、身体が大きくなるにつれて、面や鉞も大きくなりました。父親の真似をしなくても舞えるようになった頃、父親から他の人に榊鬼が引き継がれました。花祭を続けていくためには、代替わりをしながら、人から人にしっかりと受け継いでいくことが大切です。

(中 略)

私自身は、数年前から子供の頃に憧れていた榊鬼をやらせてもらうようになり、息子とも一緒に舞うようになりました。これから先も、「変わらないもの」を大切にしながら、次の世代へ想いのバトンをつなぎ、花祭を続けていくことができるようにしたいと思っています。

(「花祭展」展示より 代わりながら「変わらないもの」)

この文章を寄せた人物は、Uターンで東栄町へ戻り、ふたたび花祭に関わることになったそうだ。子どもの頃から花祭と関わり、花祭とともに成長し、上の世代から受け継ぎつつ、自ら次の世代へと手渡していこうとする様子がうかがえる。花祭は、何世代もの人々に受け継がれながら、巡りゆく季節のなかで幾度となく繰り返され、循環する時間を刻みつづけるかのようだ。

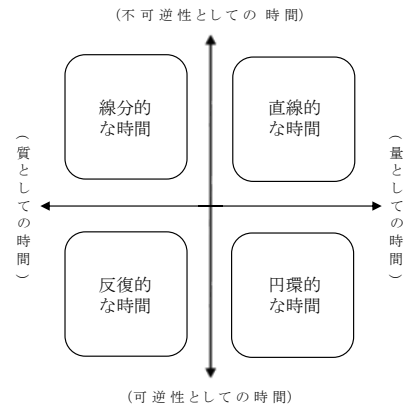
4 時間の多様性

前章では、東栄町で行われる二つの事例を紹介した。いずれの事業も花祭に関連しており、関係者の言葉のなかで時間が強く意識されているように感じられた。そのことに気付いたことがきっかけとなり、花祭に包含される時間性について考えを巡らせることになった。

時間についての先行研究は、自然科学、物理学、哲学、社会学、心理学など多岐にわたる。その全てに言及することは筆者の力の及ぶところではなく、また紙幅の都合もあるため、ここでは本論に關係する社会的な時間理論の一部について概観することにした。

現在、日常生活において一般的にイメージされるのは、軽量可能で抽象的、そして直線的な時間観念である。このような時間観は近代において成立したものとされるが、別様の時間性を探求し、「近代的時間」を相対化する試みも様々に行われてきた（鳥越 2015）。

真木は、「時間の比較社会学」において、縦軸として「質的一量的」、横軸として「可逆性—不可逆性」を置き、時間観念を「反復的な時間」「線分的な時間」「円環的な時間」「直線的な時間」の四象限に分類した（真木 1981：別図 1）。4つの象限のうち、量的で不可逆性を有する「直線的な時間」が近代的時間に相当し、社会構造の移り変わりとともに時間意識が変容してきたことが見てとれる。近代的時間が支配的になるにつれ、他の時間観念は認識されづらくなるものの、潜在し、混在しながら残存してきたと考えられる。ときに閉塞感をもたらす近代的時間を相対化しようとするなかで、近代以前の時間観念は幾度となく呼び起こされ、描き直されてきたものと考えられる。



別図 1 時間の4類型（真木 1981より作成）

また、社会的な時間を考察するうえで参照される理論に、イギリスの哲学者マクタガートが提唱した系列時間の考えがある。マクタガートは、時間をA系列、B系列、C系列の3つに分類した。A系列は、個人が経験や感覚をもとに意識する主観的時間であり、自分を起点にした「過去—現在—未来」の時制を有するものである。B系列は、客観的で無機質な時計の時間であり、何かの前や後と言うような前後関係を有するものの、時制はないとされる。C系列は、カレンダーや時計の文字盤など、時間に関する羅列、順序、模様のことを指す（野村ほか 2015）。マクタガートの系列時間の概念は時間の非実在性を論じるためのものであったが、時間の質的性格を示すうえで有用であったことから、社会的時間の様相を論じる際に度々参照されることになった。

この系列時間の考えを発展させ、新たに提唱された時間系として「E系列の時間」がある。E系列の時間は、リズムや音楽など他者や環境と同調するような時間で、対話的・相互作用的に創られるものである（野村ほか 2015）。先に触れた時間の4類型がいずれも客観的な時間の性質や形象を捉えたものであるのに対して、E系列の時間は主体と客体の交わるところで今まさに生成しようとする時間を捉える点に特徴が見い出せるだろう（別表 2）。

系列	A系列	B系列	C系列	E系列
特性	心理的な時間	物理的な時間	非時間	対話的な時間
	内在化されたもの	外在化されたもの	停止したもの	同調化したもの
(例)	自伝	動画	静止画	ダンス

別表 2 時間の種類（野村 2014）

もう一点、過去へと過ぎ去る時間ではなく、現在に留まり積み重なっていく時間について触れておきたい。浜は、フッサーやシュツ、アルヴァックスに依拠しながら、水平に流れ去る近代的な時間とは異なる「垂直に積み重なる」時間のあり方について考察している（浜 2015）。フッサーにおいては「過去把持」「想起」という形で、シュツにおいては「他者経験」として、意識のもとで保持される過去が論じられる。アルヴァックスはこれを外部化し、「空間的枠組み」と結びつく集合的記憶の在り様について論じた。歴史的な空間にはさまざまな出来事の痕跡が刻まれ、集合的記憶の構成を支える。このような「垂直に積み重なる時間」も、直線的で不可逆的な近代的時間とは異なる時間様相と考えること

ができるだろう。

以上、雑駁な整理ではあるが、本論に関係する社会的な時間について概観してきた。「すべての時間は社会的時間である」(アダム 1990=1997)とも言われるように、時間は決して一様ではなく、社会的に多様な時間観念が生じてきたことが見てとれる。次節では上記の理論を参照しつつ、花祭に含まれる多様な時間観念の素描を試み、生活や文化のなかに息づく「生きられる時間」について考えてみたい。

5 考察 ～花祭に埋め込まれる時間～

(1) 成長の時間、重なる時間

東栄町の人々は、年に一度の花祭とともに年を重ねる。子どものうちから祭りと関わり、1つずつ舞をおぼえ、花祭とともに成長する。青年期を過ぎると、子どもの頃に憧れた鬼となり、祭りの中心へと躍り出ることになる。他にもさまざまな役割があり、子どもから老人まで世代を超えて祭りに関わり、居場所を築いていく。祭りのなかにそれぞれの〈過去-現在-未来〉があり、決して均質ではない濃淡のある時間が刻まれるのだろう。

祭りに関わるのは、生まれたときから東栄町に居住する人々ばかりではない。Iターン者は東栄町に移り住み、少しずつ地域に馴染みながら祭りとの関わりを深めてゆく。移住者と地域住民が当初に感じたであろう戸惑いはやがて消え、祭りのなかに一体となって溶け込んでいく。それは、自分が刻んできた時間を〈花祭の時間〉へと重ねていく過程なのかも知れない。

Uターン者は一度東栄町を離れ、花祭とも距離を置くことになる。何年ぶり、何十年ぶりに故郷へと戻り、「花祭のある暮らし」を再開することになる。止まっていた「花祭の時間」は、移住とともに再び動き始めるのだろう。

祭りは元来イニシエーション(通過儀礼)の役割を担うものであり、東栄町においても花祭という〈非日常の時間〉は再び〈日常の時間〉へと統合される(ヘネップ 1909)。成長する子どもたちも、地域に溶け込むIターン者も、回帰するUターン者も、花祭を経由するなかで同じ時間を共有し、それぞれの時間を重ね合わせてゆくのではないだろうか。

(2) 反復する時間、循環する時間

花祭は、衰弱した太陽の力の復活を願うものであり、元来、一年のうちで最も日照時間が短い冬至を迎える旧暦霜月に行われるものだった(櫻井 2021)。春夏秋冬を繰り返す一年の移り変わりは、近代以前には主に円環的時間として認識されたものである(真木 1981)。一つの円を描くように季節は巡り、衰弱から再生へと反転する節目に花祭が行われる。花祭という区切りを含んだ円環は、悠久の自然のなかで無限に反芻されていく。

花祭における一日の流れも、同じように円を描いている。日没とともに祭りは始まり、夜が更けていくにつれて濃密さを増していく。聖なる湯を浴び、鬼に祝福され生まれ清まり、人々と山里は再生を果たす。太陽の動きと反転するかのように祭りの時間が立ち現れ、やがて何事もなかったかのように消えていく。朝の訪れとともに、鬼は山へと帰るのだ。

そして、生から死へと至る人の一生もしばしば円に例えられてきた。花祭のなかにはさまざまな円環的時間が包含され、反復し、循環し、リズムを刻み続けている。

(3) 堆積する時間、留まる時間

花祭では、竈を中心にして花宿が設けられる(別図2)。舞庭の配置や使用される祭具、面(おもて)などは地区ごとに受け継がれ、変わることなく祭りの空間に用いられる。花祭の神話的世界=コスモロジーの発現には、竈を中心としたこの空間構成が欠かせない。

各地区に残される面のうち、古いものは江戸前期にまで遡ると言う(東栄町「花祭」ウェブサイト)。長年の使用によって風化し、経年変化が顕れた事物には、積み重ねられてきた時間が痕跡として残されている。また、具体的な事



江戸の飾りつけ(早川 1968=2015)

物だけではなく、受け継がれる祭文や翁の語り、舞の形式、花宿の空間構成などによっても記憶は保存、喚起されるだろう。こうした有形・無形の諸要素が複合し、現前する「空間的枠組み」において集合的記憶が生成し、保存され、幾度となく呼び起こされる。

そして、花祭に関わる人々の意識においても、一年また一年と記憶は積み重なり、共有されていくだろう。花祭の時間は、水平に流れ去るばかりではなく、祭りという共通の場所に留まり、垂直に降り積もっていく。

(4) 同期する時間、増幅する時間

花祭の特徴の1つとして、可憐な稚児の舞やアクロバティックな青年の舞、地を踏みしめる鬼舞（山本 2018）など、豊富な舞の数々が挙げられる。これらの舞は、笛や太鼓の演奏、「てーほへ、てーほへ」のかけ声などと合わせて演じられ、相互に作用し合う。演者も観客も、それらの諸要素が同期し合い、増幅し、うねるように空間に満ちていくなかである種のトランス状態を経験する。この高揚感が、花祭が多くの人々を惹きつける由縁であり、このとき固有の時間（他者や環境と同調するE系列の時間）が発現していると考えられる。

また、相互に影響を与え合うのは舞や演奏、对人的な要素ばかりではないだろう。例えば鬼の面や鉞は、舞に没入する人と同化するかのようには振る舞い、祭りに欠かせない構成要素となる。人々は、事物や環境に働きかけるのと同時に、事物や環境からも影響を受け、呼応し、相互に対話するように祭りの時間と空間を構成していく。このとき、事物や場所に降り積もった歴史的な時間も、祭りの場へと溶け込んでゆくだろう。

花祭の場には、成長とともに刻まれる人々の〈過去－現在－未来〉の時間や、四季の移ろいをはじめとする円環的時間、過ぎ去ることなく留まり堆積する時間、他者や環境とのあいだで対話的に生じる時間など、多様な時間観念が混然一体となり、埋め込まれている。花祭に参加する人々は、この場へと投げ込まれ、多声的で（野村 2014）、豊穡な時間性を経験しているのではないだろうか。

6 おわりに ～文化と時間～

フィールドワークから帰宅した翌日、出勤するために地下鉄の駅構内へと降りていく際に、不思議な感覚を味わった。人工的な物質に囲まれた空間や正確な時間を刻むダイヤが、東栄町で感じた空間や時間と対比を為し、いつもの生活に戻ったことを実感することになった。

現代社会は、グローバル化や情報化社会の進展によってますます加速度を高め、本来多様だった社会的時間を近代的時間に統合し、世界標準の時計時間のもとに一元化する傾向にある。その結果、地理的環境や気候、歴史、文化などに根差して生み出されてきた社会的時間から質的側面が失われつつあるという（辻 2008）。

押し寄せる近代化の波のなかで、山里に秘められた花祭が広く知られるようになってから約一世紀が過ぎようとしている（折口 1930）。花祭が有する豊穡な時間性は、単調で均質化された近代的時間とは対照的なものと考えられる。目新しい刺激に満ちた現代社会では、地域に残る伝統文化・民俗文化は見過ごされがちであり、存続すら危ぶまれるものも少なくない。一方で、地域社会や暮らしを豊かにする側面があることもまた確かであり、文化が有する多面的な意義や価値を再提示し、その語りを豊かにしていくことが必要とされているのではないだろうか。

花祭に関わる人々には、〈過去－現在－未来〉という時間の連続性が強く意識されていた。地域における文化は、共時的な関係性ばかりではなく、通時的なつながりを育み、保存する装置にもなりうると考えられる。文化と呼ばれる集合的な営みは、多様な時間性をつなぎ留め、涵養し、分かち合う「時間的枠組み」を有しているのではないだろうか。花祭の語りのなかに未来の時間が含まれていたように、その枠組みが胚胎する豊穡な時間性から押し出されるように未来が創発する。そして、歴史とは本来、多様な人々の営みと豊かな時間性を孕んだものであることに思い当たるのだ。

本稿では、花祭に包含される多様な時間性を素描することを試みた。二年にわたって花祭は中止されており、書籍や映像などの資料に頼りながら花祭に含まれる時間性を想像し、過去と未来を行き来することになった。実際の現場に流れる時間や空気感を体感できたわけではなく、より具体的な考察については今後の課題としたい。また、他の事例とも重ね合わせながら、引き続き「文化と時間」の関係につ

いて考えてみたいと思う。

新型コロナウイルスという未曾有の事態を受けて、世界はいまだ戸惑いのなかにある。花祭が再開される時、止まっていた「花祭のじかん」がふたたび動き始めるだろう。まずは花祭に魅せられた先人に倣いつつ、山々に響く笛の音に誘われ、渦巻きかえす夢のような錯乱（折口 1930）の時に身を投じてみたい。

慣れないフィールドワークではありましたが、訪問した先々で快く迎えていただき、熱のこもったお話を伺い、大変有意義な時間となりました。お世話になった東栄町の皆様、榎木先生、まちプロデュースの皆様にご心より感謝申し上げます。

（参考文献等）

東栄町勢要覧 資料編（2016）

東栄町観光まちづくり協会「東栄町のじかん」ウェブサイト <https://www.toeinavi.jp>（2021/11/25 閲覧）

東栄町誌「伝統芸能編」（2003）

NPO法人てほへウェブサイト <https://tehohe.com>（2021/11/25 閲覧）

全国町村会ウェブサイト「愛知県東栄町/I ターンの若者たちが受け継ぐ地域文化と新たな地域創造への挑戦（2014年12月8日掲載）」 <https://www.zck.or.jp/site/forum/1307.html>（2021/11/25 閲覧）

「花祭展 -花祭のある暮らし-」ウェブサイト <https://hanamatsuri-ten.studio.site>（2021/11/25 閲覧）

鳥越信吾『時間の社会学の展開 -「近代的時間」観をめぐって-』（2015）

真木悠介「時間の比較社会学」（岩波書店 1981）

野村直樹・橋元淳一郎・明石真「E系列の時間とはなにか -「同期」と「物語」から考える時間系-」（2015）

野村直樹「ナラティブ・時間・コミュニケーション」（遠見書房 2014）

浜日出夫「記憶と場所 -近代的時間・空間の変容-」（2010）

バーバラ・アダム「時間と社会理論」（法政大学出版局 1990=1997）

ファン・ヘネップ「通過儀礼」（新思索社 1909=1999）

早川孝太郎「花祭」（講談社 1968=2015）

櫻井弘人「天龍川水系の神楽—オコナイと霜月祭から」『神楽の中世—宗教芸能の地平へ』（三弥井書店 2021）

東栄町「花祭」ウェブサイト <https://www.town.toei.aichi.jp/hana/top/top.html>（2021/12/6 閲覧）

山本ひろ子「変成譜 中世神仏習合の世界」（講談社 2018）

辻正二「現代社会における社会的時間」『時間学概論』（恒星社厚生閣 2008）

折口信夫「山の霜月舞—花祭り解説—」（民俗芸術 1930）

東栄町における林業と職

名古屋市立大学 人文社会学部国際文化学科4年 吉野大志

1.はじめに

東栄町は町のおよそ 90%が森林に覆われている。実際に東栄町のホームページの様子からもその自然の豊かさが窺える。今回のフィールドワークをおこなうにあたって、東栄町における自分なりの問題設定をし、それについて調査するという目標が設定されていた。私は自然の豊かさという東栄町の特徴から林業についての調査を決めた。特別講師として招かれた元行政担当の丹羽さんの講義で、東栄町の現状は年々人口が減少しており、その要因は生活するための職が不足していることが明らかとなった。また、東栄町において森林資源の活用が盛んに行われていることを知り、持続可能な林業と雇用の創出の方法を探ることを今回のフィールドワークの目的とした。



(東栄駅の様子。自然の豊かさが窺える。)

2.森林資源の活用

第1章で設定した目標をもとに、11月13日、14日の2日間で「チェンソーアートクラブ マスター・オブ・ザ・チェンソー東栄」の事務局をされている谷川さんに取材をおこなった。谷川さんは「チェンソーアートクラブ マスター・オブ・ザ・チェンソー東栄」の事務局の他に、とうえい木の駅実行委員会や東栄まちづくり倶楽部木材利用開発会の事務局

もなされており、東栄町の林業や木材利用に深く関わる人物である。また、ご自身も移住者ということもあり、移住ソムリエの活動もおこなっている。

東栄町についてすぐに、谷川さんにより東栄町の林業センターまで案内していただき、チェンソーアートクラブの活動についてお話を伺った。

まず、その設立経緯は、2000年におこなわれた東栄町の「2000年記念イベント」として、東栄 welcome21「木と遊ぼう！」というイベントが開催されたことがきっかけという。そこで、チェンソーアート世界チャンピオンのブライアン・ルース氏を招いてデモンストレーションがおこなわれた。その翌年に「チェンソーアートクラブ マスター・オブ・ザ・チェンソー東栄」が設立され、現在に至る。また、現在はチェンソーアートのみならず、木材利用や森林資源リサイクルに取り組む活動をおこなっている。その背景として、設立当時、森林の間伐が進んでおらず、外材との価格競争も相まって、赤字経営となっている山が多かったようだ。そして、間伐材の有効利用が課題としてあげられた。

現在ではこうした課題を解決するために、間伐材を用いたチェンソーアートに加えて、「とうえい木の駅実行委員会」による間伐材の出荷体験等の活動をおこなっているようだ。間伐材の出荷体験では、その対価として地域通貨券(オニ券)が貰える。オニ券は東栄町内で日用品の購入や食事に使用することができ、知識の活性化に役立っている。また、2009年から実験的活動として、チェンソーアートに用いるチェンソーオイルを植物性のものにし、生じたオガクズを堆肥にするといった取り組みもおこなわれている。以前は石油原料オイルを使用していたが、自然に還らず、環境に優しいものに変えたいといった願いから産まれたものである。この活動の前段階として、もともと雑草を抑えるためにおが粉を配るといった活動もおこなっていたそうだが、現在では植物性のオイルを活用することにとどまらず、林業センターで家庭や業者から天ぷら油を回収し、再びオイルとして用いるリサイクル活動もおこなっているという。また、チェンソーアートで生じた木端で薪を乾かすための薪だなを作るといった有効利用も進んでいる。東栄町では薪を利用している家庭が多く、需要も高いと言う。このように東栄町では間伐材の利用が非常に盛んである。

また、林業センターは間伐材利用の拠点のみならず、東栄町の人々の憩いの場になっているようだった。取材をおこなっていた1時間半から2時間の間に移住者の方々が訪ねてくることが3回ほどあった。そこでも移住者の方に取材のご協力をしていただき、実際の東栄町における移住モデルをすることができた。その取材の内容は後述する。

最後に谷川さんの今後予定している取り組みについて伺ったところ、最近になって、新しい取り組みを考えていると言う。現在、林業センターの隣にあるカーブの急な旧道を真っ直ぐな道路に新設する工事がおこなわれている。その旧道の跡地に道の駅のような施設を建て、土地利用することを目標にしているようだ。また、木育を通して子どもたちに木の魅力を知って欲しいとのことだった。実際に丸太の搬出体験に県外から2年連続で参加している親子もいたそうで、その魅力は広まりつつあると言える。

3.東栄町の林業

谷川さんにご紹介していただいて、東栄町の森林組合に勤める白井さんにも取材をおこなった。

白井さんも移住者で、Iターンで東栄町に移住してきたと言う。主に東栄町の林業における課題や取り組みについてお聞きした。

まず、東栄町に限らず他の地域にも言えることだそうだが、人手不足が第一に挙げられるという。現在、間伐しなければならぬ山は多くあるが、なかなか手が回せないというのが現状である。間伐を行えないと、樹木が立ったまま枯れてしまう、立ち枯れになってしまう。それによって、山の価値が低下し、山が放置されてしまうそうだ。また、放置されることによって、山の境界がわからなくなってしまい、更に手をつけられない悪循環に陥っている。

さらに、特に複数の個人で所有する共有林になると一層、境界がわかりにくくなるとともに、何かを行う際に共有者の合意が必要となるため、問題が複雑化しやすい。

こうした問題を解決するために、東栄町では環境贈与税を利用して、GPSを用いた境界の特定を行う活動や、スギやヒノキと比較的して費用対効果の高いコナラ(主に椎茸の原木として用いる)を植樹する活動を行なっている。

また、これらの問題の他に、取材の準備段階の調査で、林道の整備が行き届いていないことによって生産効率が悪くなるという問題が全国的に見られたため、このことについてもお聞きした。実際に東栄町近隣の設楽町では林道の整備が行われており、作業効率も高い。地理的に近いことから東栄町においても同様に行うことができるように思えたが、なかなか難しいそうだ。原因として、東栄町の山は急勾配で林道を整備したとしても崩れやすく、維持や管理が大変で導入には至らないことが大きいと言う。このように、林業における課題は一般化されているものに加えて、その土地の条件が大きく関連するものであり、一種の理想モデルを追い求めるのではなく、その土地に応じた施策が必要であることが明らかとなった。

最後に、白井さんにも今後予定している取り組みや目標について伺ったところ、自伐型林業の拡大があげられた。自伐型林業とは土地の所有者が森林組合などの請負事業体に経営や施業を委託している現行の林業とは異なり、土地の所有者が自ら行うものだそうだ。利点として、初期投資が少なく、小型機械を用いるので、比較的間伐などの施業がしにくい東栄町の土地にもマッチしている。さらに、林業参入者の大きな障壁となっている組合への所属も必要ないことや森林の管理が行き届きやすくなることも大きな利点である。



(中日新聞 2021年6月30日の記事でコナラ苗木の前でチェーンソーアートを行う様子が取り上げられていた。後方のビニールで覆われているのがコナラの苗木。)

<https://www.chunichi.co.jp/article/281940>

3.東栄町の職

林業センターでお会いした移住者の方への調査で東栄町における就労状況が明らかになった。

今回のフィールドワークを行う前の調査段階では、就労機会が少ないことで人口の減少が起こっていると考えられたが、実際の調査ではそれが少し異なることが明らかとなった。まず、フィールドワークの中で東栄町の多くの町並みを見ることができたが、求人情報が様々な場所で見受けられた。移住者の方へのインタビューでも害獣駆除(シカやイノシシ)を行うことで報酬が得られることや、知り合いから仕事の依頼も多いといった意見から職自体は多く存在しているようだ。しかし、移住者の方は「仕事はたくさんあるけど、選ぶとなると難しい」と言う。また、東栄町に住んではいるものの、町外に働きに出る人も少なくないようだ。今回インタビューをおこなった3人の移住者の移住動機としては、「田舎暮らしに憧れを持っていた」といった意見が共通していた。現状、自分の理想の暮らしとその中に含まれる職を実現するには個人の技量によるものが非常に大きいことがわかった。

インタビューをおこなった方はそれぞれ在宅ワークや物作りを通して理想の田舎暮らしを実現しているようだった。



(移住者のシモダイラさんにお土産で頂いた木槌。hanwood という独自ブランドの名前が入っている。)

4.結論

今回のフィールドワークを行うにあたって、持続可能な林業と就労機会の創出の方法を探ることを目的とした。まず、東栄町では間伐材の利用が非常に盛んであり、持続可能性が求められている今日において非常に進んだ取り組みである一方で、林業の方では厳しい土地状況や人員不足などの問題を抱えていることが明らかとなった。また、職に関して、就労機会は多くあるものの、東栄町内で生活の軸となるような職を持つためには個人の技量が求められることも明らかとなった。したがって、これらの課題を解決するための方法として、白井さんのお話にあった、自伐型林業の推進やその基盤作りが考えられる。また、防災の観点からも山の手入れが行き届くことは大きな利点といえるだろう。現状、東栄町における自伐型林業モデルは見受けられないので、他地域のモデルを調査し、それぞれの地域の特徴を活かす方法を明らかにすることを今後の課題としたい。

花祭りの現状と今後の取り組み

学籍番号：204628

氏名：轡田ゆうか

1. はじめに

日本は祭りの盛んな国であり、各地に独自の伝統を守りながら継承されている祭りが多く存在する。私自身、地元では愛知県の無形民俗文化財に登録されている大脇梯子獅子が毎年行われており、小学生のころから様々な形で参加した経験がある。同様に東栄町でも「花祭り」という古くから伝わる祭りがあり、今回のフィールドワークでは東栄町のなかでもその花祭りを重点的に調査した。そしてフィールドワークの課題として、現在の花祭りの運営や継承における問題とその解決策について考えるということを設定し、それを達成するために花祭りの特徴・強みや花祭りと東栄町の人々の関係性を調査した。そしてそれらの調査結果と他の自治体の事例を合わせて、これからも花祭りを継続して開催するために、現在行われている取り組みに加えることができそうな案をいくつか提案したい。

2. 花祭りの概要

東栄町の花祭りは700年以上前から続いており、神人和合、五穀豊穰、無病息災を願って、様々な舞や神事を夜通し行う祭りである。1976年に国の重要無形民俗文化財に指定され、起源ははっきりと分かっていないものの、吉野・熊野の修験道が奥三河の人々に影響を与えることで発展したのではないかとされている。また花祭りは町全体で一つの祭りが行われるのではなく、毎年11月～3月の間に町内の各地区で二日間ほど行われる。祭りに関する詳細は各地区の中で継承されているため、舞や祭祀に使う道具などは地区によって違いがみられる。例えば花祭りの中で重要な役割を持つ「鬼」がつける面は地区ごとに少しずつ異なり、面以外にも装束や舞の仕草などにも細かい違いがある。(写真1)近年では観光の目玉としても注目されてきており、観光

客の増加にも貢献している。



写真1 花祭り紹介パンフレットの表紙

3. 花祭りの特徴・強み

今回のフィールドワークを通して、花祭りの特徴は大きく二つあると感じた。一つ目は、強い求心力を持つ祭りであるということである。実際に花祭りに参加したり関わっていたりする人の話を多く聞いたが、どの人も花祭りに真剣に向き合っており、また話にとっても熱がこもっていたように感じ、「まるでオリンピックのような強烈な一体感」という言葉もあった。それほどまでに人々の心を魅了する理由としては、今よりもっと不便であった時代は簡単に街に出ることができず、町民にとっては貴重な大きな娯楽であったということや、かつては男女の出会いのという面も強かったこと、さらに大掛かりな行事であるため準備はほぼ一年かけて行うので、花祭りが常に暮らしと共にある存在だということが挙げられるのではないかとされている。加えて花祭りの求心力の強さを表す例として、花祭りを開催する地区の出身者は、Uターンとして戻ってくる場合が多いということがある。すなわち、地域への愛着を花祭りの魅力がさらに増幅させているのではないかと予想できる。

二つ目の特徴は、外の人を受け入れる文化が根強いということである。祭りの最中にお酒を飲むとき、外から来た人も交えて皆で楽しむという風習があるため、地区によって差はあるものの、基本的には外部の存在が中に入ってくることにに対して抵抗が少ないと感じた。それは東栄町全体の雰囲気にも直結しており、和太鼓のプロ団体志多らが東栄町に拠点を移したとき、当時は移住などという概念がまだほとんど浸透していなかったにもかかわらず、批判はあれど結果的によそ者である志多らを受け入れたということから、よそ者を受け入れるという精神が花祭りを通して人々に根付いていたのではないかと考えることができる。

4. 地域の人々と移住者にとっての花祭り

東栄町の人々にとって花祭りは、自分自身のアイデンティティであり、また町民としての誇りを生む重要なものである。東栄町の公式キャラクターのオニスター（写真2）が花祭りで登場する鬼であることから、町民が花祭りを東栄町のシンボルとして認めているということが分かる。それに加えて、花祭り当日だけでなくそれに関わる準備や運営は、世代を超えて地域の人々が深く交流する場でもある。同じ地域の年配者から子供たちへ舞や役割の内容が伝達されたり、花祭りを乗り越えることで結束力が強くなり、防災などの協力意識が高まったりするという面もある。またそれは移住者にとっても同様で、花祭りに対して真剣に取り組み、準備などから積極的に参加することで、地域の人々と盛んに交流ができる貴重な場でもある。一方で地元の人々の強い思いと移住者の意識に差ができすぎると、孤立やトラブルを招く恐れもある。そのため移住を進める際に、行政の担当者が移住希望者の花祭りへの参加の意思の程度を考慮して、どの地区に移住を薦めるかを検討することもある。つまり、住む場所という重い選択を大きく左右するほど、花祭りは東栄町の



写真2 東栄町観光マップの表紙

人々にとって覚悟や熱意が必要な存在であるということが分かった。

5. 花祭りの運営や継承における問題

花祭りの運営において問題になっていることは大きく二つあるということが今回の調査で分かった。一つ目は、花祭りの観光化と神事としての厳格さのバランスをどのように取るのかという問題である。先述したように花祭りは東栄町の人々の生活に深く根差しており、言い方を変えると、花祭りは東栄町の暮らしそのものを祭りにしたといわれている。一方で、近年花祭りは民俗学者だけでなく一般の人々にも存在が周知されてきており、花祭りを目的とする観光客も増加傾向にある。また東栄町の公式観光ホームページに多く特集が組まれていることから、花祭りが東栄町の観光において必要なイベントであるということが分かる。しかしながら花祭りの観光化が進むにつれて、観光客や記者がカメラに鬼を映したいがゆえに場所を取り、祭りの進行や役の人々の動きを妨げてしまったという事例も出てきている。他にも、観光化に伴い「暮らしを見せる」という花祭りの精神を守ることが難しくなってしまうという弊害も起きていて、さらに観光客を歓迎するのか、拒絶するのかという傾向が地区によって異なっているため、そのこともより問題を複雑にしている。このように、現在の花祭りには、観光のために変えていく部分と伝統を重視すべき部分の線引きを慎重に見極めなければならないという問題がある。

二つ目の問題は人手不足である。花祭りを行う地区は減少し続けており、2019年にはさらに布川地区が休止を決定した。原因は様々であるが、どれも人口減少による祭りの担い手不足の影響が強いということが分かった。例えば祭りにかかる費用は地区全体で負担するため、人口が少なくなるにつれて一人一人の負担額は大きくなったり、祭りを運営する際、人手が不足し一人でいくつもの役割を果たさなければならない状況になったりしてしまう。さらに、少子高齢化が進み、舞や役割の伝達をする前に人が亡くなってしまったり、そもそも後継ぎが見つからなかったりすることも多い。このように他の自治体と同様に、人口減少による影響が祭りの継承に大きな影を落としている。

6. 問題について行われている取り組みと提案

第5章で触れた二つの問題をはじめとする花祭りの様々な課題に取り組む団体として、花祭部の存在がある。花祭部は2019年から活動を開始した団体で、地域を超えて横のつながりをつくること、また多様な祭りの担い手を獲得することを目的としている。お話を聞いたところによると、ほとんどのメンバーが花祭り関係以外の職に就きながら活動しており、花祭りの課題に対して危機感を持った若者世代が団結して結成されたものである。花祭りが存続していくための有効な手段として、私はまずこの花祭部を将来的にNPO法人化することは良いのではないかと考えた。根拠としては、京都府南丹市美山町上げ松の事例において、NPO法人化することのメリットの一つとして多種多様な人材が可能であることが挙げられており、それが花祭部の方針と一致しているからである。他にも、NPO法人化することで、町民の祭りの保護に対する責任の意識がより強くなったり、資金の流れの透明性が生まれやすくなるという利点もある。美山町の上松と東栄町の花祭りは、どちらも豊かな自然を持つこと、人口減少と担い手不足という問題を抱えていること、県や府指定の無形文化財であるということなど、共通点が多い。美山町以外でも地方の祭りを存続するために保存会をNPO法人化する場合は多く、保存会が地区ごとに分かれている東栄町においては、地区の垣根を超えてつながりをもつ花祭部がその役目を担うべきではないかと考える。またNPO法人化することで、観光と花祭りの関係性を考えた時に、資金面や行政との連携という点でアプローチできる方法が増えることが予想される。

それに加えて、図1で示す花祭部が求める多様な担い手層を獲得する方法の一例として、山村留学を提案したい。山村留学とは、自然豊かな山村や漁村へ小中学生が親元を離れて一定期間移り住み、地元の小中学校に通いながらその土地独自の経験を積むというシステムである。NPO法人でほへの代表者の方や花祭部の代表の方のお話の中で、後継者育成に関する大切なこととして、東栄町の子供たちへの教育というものが共通して取り上げられていた。それは、子供たちが幼い頃から花祭りにより深く触れさせ、魅力を感じてもらうことによって、大人になったときにまた戻ってきたいと思ってもらえるようにすることである。具体的には、学校教育の中に花祭りの体操を取り入れて、日常生活の中にも浸透させるといった取り組みが行われている。このように花祭りを意識した地域ぐるみの教育や実

際に花祭りに参加するという体験を、東栄町の子供たちだけでなく、山村留学によってやってきた子供たちにも経験させることができれば、将来花祭りの担い手になる可能性のある若者を増やすことができるのではないかと考える。東栄町と山村留学の関連について調べたところ、御園地区は御園小学校が閉校する際に山村留学を行ったことがあり、それ以来特定の地域と交流が続いていることが分かった。その経験を活かしなが、全国から広く参加者を募集し、他の地区でも山村留学を積極的に行うことで、留学生同士の交流など

祭関係者の全体像と「多様な担い手」

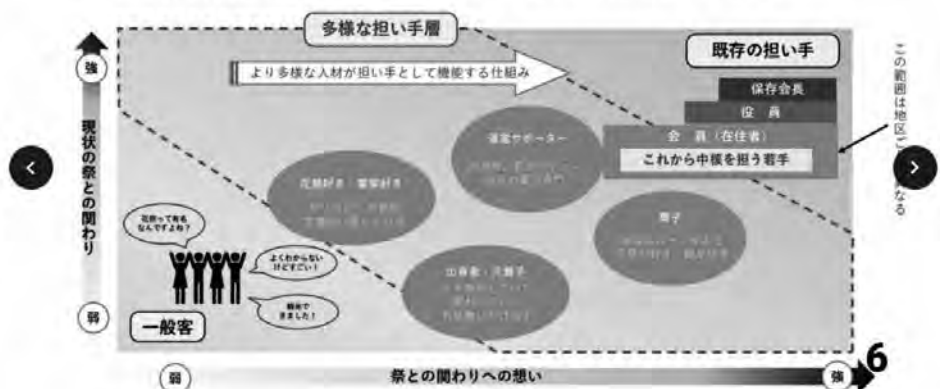


図 1 花祭部が求める多様な担い手

(<https://hanamatsuri-ten.studio.site/about%20us>)

も図ることができればなお良いのではないかと考える。

7. おわりに

今回のフィールドワークでは、花祭りに焦点を絞って調査を進めることで、花祭りだけではなく東栄町の魅力を色々な視点から知ることができた。また調査結果をもとに、花祭りの存続のために有効ではないかと思う案を提示させていただいたが、地元の方のお話にあったように、成功例はまねるものではなく参考にするもので、現地の人の感覚を優先すべきであるという考えに私も深く同意する。よって、もし必要であればこのレポートに何か取り入れられる部分や、新しいアイデアに繋がる部分があれば嬉しい。東栄町の益々の発展を心から願っている。

参考資料

(1)石田 雄大、2020 年、香川大学 経済政策研究 第 16 号 (通巻第 17 号)

<http://www.ec.kagawa-u.ac.jp/~tetsuta/jeps/no16/ishida.pdf>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(2)東栄町のじかん「東栄町の伝統神事 花祭特集」

<https://www.toeinavi.jp/spots/hanamatsuri/>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(3)花祭り公式ホームページ

<https://www.town.toei.aichi.jp/hana/top/top.html>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(4)「次世代への祭りの伝統継承－京都府南丹市美山町上げ松の事例－」

http://www.consortium.or.jp/wp-content/uploads/page/27466/14-09_2.pdf

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(5)文化遺産の世界「『民俗芸能』を継承する各地の取り組み」

<https://www.isan-no-sekai.jp/report/7243>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(6)オマツリジャパン「過疎の街に受け継がれる民俗芸能「花祭り」、東京の子供たちと歩んで」

<https://omatsurijapan.com/blog/okumikawa-hanamatsuri/>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(7)花祭展－花祭のある暮らし－

<https://hanamatsuri-ten.studio.site/about%20us>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

(8)NPO 法人 全国山村留学協会

<https://www.sanryukyo.net/new/>

(最終閲覧日 2022 年 1 月 6 日)

東栄町 FW 研究レポート

204650 野口美有

問い

東栄町の民間、行政、企業の立場から見るまちづくりとはどういったものか

問いの背景

一年生の後期の授業で現代都市問題という授業を受講した。そこで、民間・行政・企業の3つの分野が相互に関わることで、まちづくりが成功すると聞いた。東栄町は街づくりを現在も力を入れているが、その3方面で見据えている事が異なっていると、まちづくりは上手くいかないと考え、実際に民間、行政、企業のまちづくりに対する考え方が気になった。

文章の構成

東栄町フィールドワークにて、お話を伺った順番で調査したことをまとめ、最後に結論を述べる。はじめに行政、次に企業、最後に民間という順序で述べる。

1. 行政 - 東栄町役場尾崎さんのお話より

町役場の尾崎さんから、現在東栄町役場で行っている事を伺った。行っている事は、集落カルテの作成、地域おこし協力隊の運営、まちづくり基本条例の策定、田口高校魅力化事業である。順に詳細を述べる。まず集落カルテの作成では、集落ごとのカルテを毎年作成している。目的は、各集落自身が自立して課題を見つけることである。情報を町役場などの行政だけで管理するのではなく、各集落自身が知ることで課題感を持ってほしいという想いから毎年作成されている。地域おこし協力隊の運営では、平成25年度から始めたそうだ。（総務省で地域おこし協力隊自体は平成21年度から始動）これまでに10名卒業し、1名在籍している。卒業者のうち8名は住んでいる。（高いや就職）一期生には danan のあいさん、naori の大岡さんがいる。まちづくり基本条例では、H30に明文化された。目的としては、町民皆でまちづくりをすることで、実際おこなわれている事は、毎年まちづくり基本条例について11名の委員と話し合いをしている。11名は、元々はまちづくり座談会開催のためのメンバーだったが、話し合いの中で座談会といった非本質の内容（座談会を開いて打ち上げ花火などを行う予定だった）ではなく、基本条例に基づいた活動をすればいいのでは、という意見が出たため、まちづくり基本条例の活用方法に関して話し合うこととなった。現在尾崎さんは、この話し合いの時間は、座談会よりも濃い時間に来ているのではと感じている。メンバー11名の内訳は、年齢では19才～60歳代の方がおり、生まれてからずっと東栄町にいる人も、移住者も、東栄町に住んでいない人もいる。基本条例に関する話し合いの中身としては、まちづくり基本条例をどう広めるか、そもそも広めた後、実践してもらえるか、また、まちづくりは本当に必要かといった話し合いをしている。また、会議の内容は会議録として保存しており、公表もしている。また、会議時間はもともと18時から20時までとされていたが、21時半まで伸びることも多い。それほど、会議が盛り上がり時間内に終わることが少ない。田口高校魅力化事業に関しては、お仕事フェアを開催し、豊根村、設楽村、東栄町の

中高生対象に希望する事業者に来てもらい、学校存続に向けて課題を出して解決に向けた取り組みをしている。

また、すべての取り組みは、総合計画をもとにしており、総合計画は五年ごとに前後期計画として作られる。すべて、本当に東栄町に必要な事業かどうか吟味し、活動している。

また、尾崎さんは情報公開することを大事にしており、税金の使い道も税金を払っている人全員が知るべきだと考えている。それに加え、本来ならば地域コミュニティに関して等の補助金をもらった人が、補助金を使って何を行ったかの発表会や報告会をやるべきだと述べていた。

- まとめ

尾崎さんのまちづくりに対する想いとしては、住む人すべてが幸せに暮らしていけることだ。だから、まちづくり基本条例などまちづくりに関する取り決めが出来たからといって、それがゴールとはとらえておらず、住む人が幸せに暮らしていくための手段だと捉えている。東栄町は移住者が多いが、移住者に関しても同じ町の人と捉えており、移住した人が住み続けたり、仲間を増やしていったりしてくれることを願っている。

2. 企業 - 志多ら/NPO 法人てほへの大脇さんのお話より

- 志多ら設立までの流れ

志多らは下山学校を利用して、のきやま学校として運営している団体だ。下山学校が平成22年に閉校し、平成26年に町づくり基本条例が設置されるという流れに乗り、志多らが下山学校をまちづくりのため使用するという目的で補助金30万を町役場から受けとり、運営を始めたというのが、のきやま学校設立の流れである。地元の人の思い出のある学校を壊したくないという想いもあり、志多らが運営することが認められた。

- 志多らに関して

志多らは、東栄町にもともと住んでいた人たちの団体ではなく、創設者の大脇さんが特色ある太鼓団体を作りたいという想いから設立した。のきやま学校の運営は、志多らではなく「NPO 法人てほへ」という団体名で運営している。「NPO 法人てほへ」（以降、てほへと記載する）は11年前に志多らのファンクラブをNPO 法人化したものであり、志多らとてほへの二枚看板で運営をしている。使い分けとしては、外部への発信が志多らで、様々な受け皿をてほへが担っている。のきやま学校の運営を始めた当時、すぐに東栄町に溶け込めたわけではなかったが、挨拶や地域の掃除などを通じて時間をかけて馴染んでいった。

花祭りという700年続く伝統ある祭りも誘われるようになり初めて参加した時は、花祭りを研究する学者や花祭りファンから大ブーイングを受けた。現在も花祭りに参加しているが、当時のような批判もなく多くの志多らメンバーが参加している。また、多くの志多らメンバーは東栄町の消防団に所属しており、花祭りでは消防団の活動があるため、花祭りと消防団はセットで参加しているようだ。

- のきやま学校に関して

のきやま学校での事業内容としては、のきやま学校の運営、Café のつきい、NOKIYA（木製商品の販売）、ブルーベリー農園である。さまざまな事業を運営しているが、すべてにおいて熱いお話を聞かせて頂けた。

のきやま学校の運営に関しては、好奇心を大事にしており、新しいことにどんどんチャレンジしていているそうだ。また、のきやま学校をただの施設ではなく皆の学校として見てもらいたいとおっしゃっていた。

のきやま学校の廊下にはかつて通っていた生徒の同窓会の写真などが飾られており、自分の通っていた学校ではないがどこか懐かしさを覚える雰囲気がした。Café のつきいも、併設している図書館も落ち着いた雰囲気があり、とても居心地がよかった。そういった空間づくりがとても上手だと感じた。

大脇さんの話から、のきやま学校での運営で大事にしている事をまとめると以下 5 点になる。

覚悟を持った活動をすること、暮らしの中での地域に対する熱い思い、音楽など何もないところからの創造力、団体活動の中での団結力、ハングリー精神を持ち実行する事。

- 地域づくりに関して

また、地域づくりというものは、他の地域を参考にするのは良いが真似をすると失敗するとおっしゃっていた。また、人の心を引き付ける地域づくりをするには、人間力（笑顔で魅力にあふれる人材、創造力、実行力）と地域力（文化の魅力、地域連携）が必要だともおっしゃっていた。加えて、子どもは地域の子どもの子として見ており、地域で子育てをするという価値観をもっておられた。

- まとめ

大脇さんは、まちづくりに対して強い持論を抱いているが、それは東栄町役場の尾崎さんと変わらない、各人が主体性を持って活動することを軸に置いていた。また、企業側としてまちづくりに関われることを模索し、図書館運営なども行っていた。

3. 民間 - 花祭り協会の伊藤さんのお話より

民間の人では、東栄町まちづくり協会の伊藤拓真さんにお話を伺った。伺った内容は、花祭りという伝統的な祭りに関してとまちづくりに関してだ。

はじめに花祭りに関して伊藤さんが行っている事を述べ、次にまちづくりに関して考えている事や行っている事を述べる。

伊藤さんへは二度にわたってお話を伺ったのだが、一度目は花祭会館で、二度目は私たち学生の宿泊先の danan で伺った。

- 花祭りの継承者問題

花祭りに関しては、継承者不足という問題にぶつかっており、若者の中で継承問題解決のために取り組む花祭り部というものを作り、花祭り会館で活動をしているそうだ。花まつり部はただの保存会ではなく、進化させることも視野に入れ、活動している。花祭り部は、20 名で構成されており、20 代から 30 代の方が多く、これから花祭りを引き継

ぐ側で、中核を担っていくような人が所属している。内容としては、マニュアル化等ではなく花祭りを写真等のデータに収める事だ。またマニュアル化を推し進めない理由は、若者が全てそういったことをすすめてしまうと、年上の世代がやらなくなってしまうからだそう。また、花祭り部の人でも集会に来ない人もいるが、来れない時は来れないで大丈夫だと考えており、花祭りや暮らしに関して熱い思いがある伊藤さんだが、暮らしに関して無理して暮らしが悪くなるのは元も子もないと考えており、楽しくやれる範囲で皆と一緒にやっていきたいと考えている。

- 伊藤さんの花祭り観光客への捉え方

花祭りは大変人気があるため、他県からの観光客が訪れる。その観光客に対して何を思っているか伺った。地域の暮らしを覗くことになるけど、写真など撮っていかれるのはあまりよく思っていないようだった。寄付は嬉しいが、本来の花祭りでは写真を撮られるために行っているものではないので、本来の花祭りを大事にして欲しいとのことだった。また、写真を撮りたいのであれば花祭りフェスティバルを行っているためそちらに来てもらうことを望んでいた。

また、花祭りを運営するための後継者不足に関して、伊藤さんは移住者を増やすのではなくもともと住んでいる人が戻ってくるような仕組みにしたいとおっしゃっていた。そのためにも、子どものころから町に触れ、まちが大好きになってもらおうとしている。

伺ったこと以外に、花祭り会館では

花祭り部の方が、空いてるときにきており、シフト制ではなくボランティアで、花祭りに関して訪れた方に対して説明している。

伊藤さんは観光協会にも所属している。観光協会での動きに関しては、平成 21 年度から始動し、観光地らしい観光とは違い東栄町らしさを押し出すような街づくりをしている。例えば、フリーペーパーの作成をしており、これは観光客向けではなく、東栄町に住む人に向けて作成している。まちづくりと聞くと観光客集客に向けて考えられがちだが、東栄町のまちづくりは住む人がより住みやすい環境になるよう施策を練られている。

- まとめ

伊藤さんは、まちづくりや花祭り部の活動の根本的な想いとして、住む人がずっと住み続けられるような街にしたいという思いがある。それが派生して、さまざまな活動につながっているため、行っている活動に一貫性があり、その周りには仲間がいた。

4. 結論

東栄町は、行政、民間、企業の 3 方向からまちづくりに対して積極的な人が際立っている人がおり、3 者ともこの町に住む人が住み続けられることを願い、まちづくりをしていることが明らかになった。移住プロジェクトも、花祭り継承も、起業も、町の人により良く住み続けられることが必ず視野に入っているため、どの人の話を聞いても他の方の名前（例えば、大脇さんや伊藤さんから話を伺っているときに尾崎さんの話題が出て

くる等)が出てきた。東栄町は、密接に互いが関わり合っている、つながりの強い街である。したがって、東栄町はまちづくりの進捗が良く、これからも発展していこう。

5. FWを通して

東栄町の人々の暮らしは、温かく、そして積極的だと感じた。自分たちで暮らしをより良くしようという気持ちを持って暮らしており、そのために自分で事業を立ち上げたり、仲間を集めて活動していたりしている。どの人も1人で何とかしようとするのではなく、誰かを巻き込んでいる。それは、自分は町の1人であるという意識があり、集団の中の自分だという捉え方をどの方もしているからではないだろうか。

ただ受け身でいるのではなく、自分たちで作っているから町の人達が生き生きしているし、私たち訪問者に対しても、自信が行っている活動の事を聞くと、誇りを持ってはきはきと話してくださる。東栄町は、そのような想いと行動の溢れる町であった。

東栄町 FW から考える特定地域づくり事業協同組合に対する主観

名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科

204663 三品美咲

提出日：2021/12/31

授業名：東栄町 FW

【目次】

- ・ 東栄町 FW のインタビューを経て……………1-5p
- ・ 東栄町移住者の方のインタビューを踏まえて思ったこと・考えたこと……………5-6p
- ・ 特定地域づくり事業協同組合について……………6-7p
- ・ 特定地域づくり事業協同組合に対する主観……………7-8p
- ・ 御礼……………8p

《東栄町 FW のインタビューを経て》

東栄町の FW では、東栄町の方々に多くのお話を聞いた。そのお話の中の一部を以下にまとめた。

私は、この FW で、東栄の人が紡いでくれた言葉が一番心に残っている。だから、学んだことを箇条書きにするなど、体系的にまとめるのではなく、話し口調でまとめたいと思った。そのため、話をしてくれた人ができるだけ 1 人で話しているような感じでまとめた。話をうかがっていた私や他の学生の質問などは省いた。

結果として、その人が実際に話した言葉や話した順序、答え方などに違いがあると思うが、筆者の解釈として考えてもらいたい。

2021 年 11 月 12 日（金）13：00～14：55

☆尾崎あゆみさん（東栄町役場 振興課）

平成 20 年に東栄町にあった唯一の高校、田口高校が閉校しました。そしてその頃から、人口が年 2-4% ずつ減っていき、高齢化率も 50% に近くなっていきました。そこで、H24 年から、行政が移住施策を大々的にとるようになりました。もともと平成 18 年から、空き家バンクという制度を運用し、行政が移住者を増やす試みはしていたのですが、そこには、行政は移住者との契約をとれない、という大きな問題がありました。また、空き家の登録が少なく、供給するのが難しい状況にありました。その理由として、空き家の片付けや空き家のリフォーム、仏壇の処分をするのが大変だということがありました。

平成 24 年からは、東栄町が空き家のリフォームをすべて請け負い、空き家の供給量を増やすための施策を始めました。行政が運用すると言うことで、空き家を提供する人にも、空き家を求める人にも安心してもらえ、結果として県内から 11 世帯 41 人に入居してもらえました。しかし、行政の負担（費用）が非常に大きいという問題に直面し、このまま継続していくことは難しくなりました。その時期から、「なんのための移住施策なのか」を考えるようになりました。

このときまで、とにかく東栄町に住む人を増やすための施策をしていました。東栄町はこのままでは限界集落となり、必要な税収を得ることができず、存続できない。だから東栄町に住む若い世帯を増やそうとしてきました。しかし、移住者を増やすことで、移住前の契約トラブル、移住後の生活トラブルなども多く発生していました。ここで、町として、行政としてやらなければならないことは、「東栄町の暮らしを守ること」であると改めて認識しました。そして、移住したい人にとって必要なことは、住む場所を用意するだけでなく、この町で暮らし続ける施策を用意することだと思いました。

平成 28 年から移住者支援施策を、この町で暮らし続ける施策に少しずつ変えていきました。行政が移住したい人との契約を結べないという問題を解消するため、民間の不動産による仲介を委託しました。行政は、移住者のリフォーム代などの金銭面の補助をするにとどまるようにしました。また、平成 30 年からは移住ソムリエを制度化しました。これの一番の目的は、東栄町で暮らすということの“思い”を共有し、コミュニティを強化することにあります。つまり、この制度が、東栄町に住んでいる人と東栄町に移住したいと考えている人とが、また、東栄町に住んでいる人同士、移住を考えている人同士でも、東栄町での暮らしを語るきっかけになり、自然にコミュニティを形成、強化してほしいと思っています。

現在、契約を民間不動産に委託するしたことで、元来の契約トラブルは減少しました。しかし、田舎のおせっかい文化や義理人情を大切にする風習が、移住者との感覚にズレをもたらしていることもあります。

移住者はいつから町民になるのでしょうか。移住者はいつまでも移住者でいてはいけません。東栄町は頑張らなくては存続できない集落です。そのことを認識した上で、みなが集落の存続、つまり、まちづくりに必要なことを考えなくてははいけません。

東栄町の移住施策は、今、移住者を増やす段階ではないと思っています。東栄町民でまちづくりをしていく、この町で暮らし続けるために必要なことをしていく段階にあると思っています。今年からまちづくり座談会を始めましたが、そもそもこの座談会は何のためにやっているのか、これを考えるところからスタートだと思っています。

2021 年 11 月 12 日（金） 15：00～16：30

☆大岡千紘さん（naori ツアー・ディレクター）

私は和歌山県で生まれ、高校まで和歌山で過ごしました。大学進学を期に、京都で1人暮らしを始めました。2011年、大学2年生のときに「地域おこし協力隊」に興味を持ち、卒業後には活動したいと思うようになりました。どの地域で活動するか悩んでいたときに、東栄町の方からオファーをいただいたことがきっかけとなり、東栄町で3年間「地域おこし協力隊」として活動することを決めました。

「地域おこし協力隊」になった当初も、東栄町の方から拒否されるような感じは受けませんでした。自分がイメージしていた暮らしとのギャップもそんなになく、過ごしやすかったと思います。

今は結婚して、東栄町で家族とともに暮らしていますが、元々定住するつもりはありませんでした。「地域おこし協力隊」に参加したときも、最初の2年間でまちづくりを勉強して、3年目には辞めようかとも思っていました。企業に就職することも考えていました。しかし、naoriの仕事が軌道に乗り、このまま生活することができるなどと思ってからは、東栄町に住もう、東栄町で生活しようと決めました。

これまで私は和歌山、京都、そして三河（東栄町）と3つの地域で生活してきましたが、一番帰りたいと思える場所がここ（東栄町）なんです。東栄町にはいろんなことをやっている人がいて、開発的だと感じています。活動や話し合いがとても多いです。役場のワークショップなどにもよく顔を出すのですが、これまで意識していなかった福祉のことに目を向けるきっかけにもなり、忙しいですが、とても楽しいです。

これまでのnaoriの活動は、東栄町に外からの来訪者を呼ぶための活動でした。まちおこしという名のイベントを作って、お客さんからお金をもらうことをしてきました。しかし、今の東栄町は、てこ入れの時期ではないと思っています。まちづくりを内面、外面的に実施し、あらゆるクオリティを上げていく時期なのではないかと思っています。そのために、naoriももっと東栄町の中の人のための活動をしていけたらいいと思っています。

2021年11月13日（土）

☆瀬頭さん（パレタコ食堂経営 東栄町の空き家を購入し現在リフォーム作業中）

去年、役場の人に教えてもらい、補助金を使って空き家を買って、2020年の11月から東栄町に住んでいます。今は自分で作った自然食スパイスカレーの移動販売をしています。

元々、神奈川県で生まれ、大学は東京でした。大学2年生くらいのとき、2011年の東日本大震災が起きて、原発の問題を目の当たりにしたんですね。それで、このままではいけないと、環境問題に興味を持ちました。それまでは、大学で海洋研究をしていたのですが、社会に意味のない、環境問題の役に立たないなって思うようになりました。そして、自分が環境問題のためにやりたいことって飲食だなって気づきました。安全なものを安全に食べることが一番いいことだなって思うようになったんです。食べ物屋の食べ物って、何が入っていて、それがどんな環境で育てられているかなんて分からないじゃないですか。

それがすごく嫌だなって感じるんです。

東栄町では、自然農法の米を自分で作ったり、ジビエも手に入ったりして、それを食べることができて、自分のやりたいことがすごくできるんです。余白の多い生活ができて、幸福度が高いなって思います。最近と同じカレー屋さんをはじめとする飲食店も増えていて、どんどん快適になっていると思います。2022年の7月から店舗販売をする予定です。移動販売から店舗販売に変わることで、実際にお客さんが足を運んでくれるのか？という不安はありますが、自分の理想のお店で自分の売りたいもの売ることができることにとってもわくわくしています。



(上：瀬頭さんに話を聞いている様子)

2021年11月13日(土)

☆ピッコロパン屋さん(パン屋さん)

元々千葉県の上野に住んでいました。2012年に別荘としてここ(東栄町の空き家)を買って、定年退職をしたことをきっかけに2018年に移住しました。別荘として、この家を使っていたときから、移住者の集まりなどに積極的に参加し、地元の人と関わっていました。東栄町は田舎の関わりが強いので、畑にいても声をかけられるんです。いいですね。

まちづくり実行委員が公募されたのを知り、ぜひやりたいと思い応募しました。現在11人の実行委員のうちの1人です。このまちづくり実行委員は、まちづくり基本条例を東栄

町の人びとに広めるために集められましたが、話し合いによって、なぜ広める必要があるのか、という原点に回帰し、今はまちづくり基本条例の学び直しをしています。建設的で深い話し合いができています。

今、自分が東栄町の一員であることを認識出来ますし、まちづくりの動き始めに関与できていることがとても嬉しいです。まちづくりはまちのクオリティを高めていくことだと実感します。

東栄町の魅力は、東栄町にずっと住んでいる“中の人”には当たり前すぎて理解されません。外から来た人はそれを実感できます。移住者はその町の良さを認識し、広げることができるので、移住者はそのまちにとっていいものだと思います。

2021年11月13日（土）

☆杏の家さん（パン屋さん）

2020年2月14日に隣町の新城市から引っ越してきました。50歳くらいの時に帯状疱疹を患い、このままサラリーマンとして外仕事をしていくことに不安を感じ、奥さんがいつかパン屋さんを開きたいと考えていたこともあって、脱サラしてパン屋さんを開くことに決めました。自分たちのイメージに合うのどかな雰囲気空き家を探していくうちに、東栄町にたどり着きました。

移住を考えていたとき、役場の尾崎さんが積極的にコミュニケーションを取ってくださいました。尾崎さんから、東栄町は「美のまち」を目指していると言われました。私たちは美術が好きですし、この町と価値観が合っていると思いました。また、移住を悩んでいたときには、東栄町に移住した方が東栄町の魅力を語ってくれました。そんなご近所の方との素敵な交流もあって、東栄町で空き家を買うことにしました。

自分たちの住んでいる所は花祭りがなくなった地域なので、地域としての関わりは年に2、3回ほどで、前に住んでいた新城の方が（地域の関わりは）多かったです。移住ソムリエに任命はされましたが、特に移住希望者の方のための活動はしていませんね。

東栄町はやはり買い物に行くのも不便ですし、ここでの暮らしに慣れないこともあります。移住には、やはり収入が大事だと思います。仕事をするにしても、事業をおこすにしても、収入がなければ、お金の使い方を決めることができませんからね。収入は不安要素ですが、そこに誰も協力はしてくれません。

今は自分たちの理想に近い生活ができていて、自分たちの作りたいパンを作ることができてとても嬉しいです。

《東栄町移住者の方のインタビューを踏まえて思ったこと・考えたこと》

・移住にはいろいろな形がある。

- ・ 移住には覚悟が必要である。
- ・ 田舎暮らしは楽ではない。
- ・ 移住定住にはお金が必要である。
- ・ 覚悟するためには、安定的な収入源や地域のコミュニティの支援が必要である。
- ・ まちづくりには段階がある。
- ・ 必要なまちづくりは変わっていく。
- ・ まちづくりには共有すべき指針と住民の活動が必要である。
- ・ まちづくりには積極的な人と積極的でない人がいる。

《特定地域づくり事業協同組合について》

特定地域づくり事業協同組合とは、地域人口の急減に直面している地域において、農林水産業、商工業等の地域産業の担い手を確保するために総務省が手がける財政的、制度的な支援組織である。2020年に始まった、人口が急減している地方に向けて、安定的に働き口を確保するための新制度であるが、認知不足が課題とされている。

私は、東栄町 FW を通して、この制度が日本の人口が急減している地方で役立つのかどうか考える。

「地域づくり人材」とともに、ふるさとの未来づくりをしてみませんか

組合設立のPOINT

- POINT 1 組合員を集めよう!**
はじめに、組合員になる事業者を見つけましょう。組合設立には、地域内の事業者を広く見上げる必要があります。
● 以前に籍していた事業者で把握している規模拡大意向のある法人・個人をターゲットに制度説明を実施
● 市内事業者を対象としたアンケートを行い、人口・年齢・性別を踏まえて課題をもつ事業者に声掛けを実施
- POINT 2 組合事務局の職員を確保!**
組合員が集まったら、組合設立後に事務局を回り職員を確保しましょう。
● 商工会に相談し、商工会のOBを紹介してもらい事務局員として採用
● 会計年度任用職員や地域おこし協力隊のOB・OGを事務局職員に採用
- POINT 3 関係機関への事前相談!**
組合設立に向けて必要となる手続きについて事前に関係機関へ相談しましょう。
● 県が関係者(労働局や中小企業団体中央会)との関係構築を実施
● 県主導で市町村・県・労働局・中小企業団体中央会をメンバーとする協議の場を設置
- POINT 4 地域づくり人材(派遣職員)の募集方法の検討スタート!**
特定地域づくり事業の開始に向けて、「地域づくり人材」となる派遣職員の募集方法を検討しましょう。
● インターネットでの募集や市の定住給付金への情報提供にて確保
● 移住定住担当部署と連携し、市が主催する移住相談会にて情報提供を行い確保

特定地域づくり事業協同組合に市町村が財政支援を行う場合、国の財政支援を受けることができます!

対象経費	派遣職員人件費	事務局運営費
対象経費の上乗率	人については400万円/年・人	その他については600万円/年
交付額	対象経費の1/2までの範囲で市町村が支援した額の1/2	

組合員の方

移住、定住の意思を持って入居したい事業者が多い地域になっています。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

コロナ禍で、経営状況は、厳しくなっています。事業を続けるための資金や、人材確保が難しくなっています。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

高齢化が進む地域では、労働力不足が深刻化しています。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

地方の産業振興には、人材の確保が不可欠です。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

コロナ禍で、経営状況は、厳しくなっています。事業を続けるための資金や、人材確保が難しくなっています。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

地方の産業振興には、人材の確保が不可欠です。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

この制度のおかげで、地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

地方の産業振興には、人材の確保が不可欠です。地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

この制度のおかげで、地域内でも、得意な分野やスキルが活かせる場所や、収入アップが期待できる場所、生活環境がよい場所など、移住先を選ぶ際の参考にしてください。

(上：総務省 リーフレット 「特定地域づくり事業協同組合制度」)

特定地域づくり事業協同組合の目的は、

- ① 人材不足地域において、必要なときに、確実な人材（派遣人材）確保する。
- ② UIJ ターンのハードルを下げ、地方移住者を増やす。
- ③ 地方移住者がマルチワークで様々な業種を行うことができるようにする。
- ④ 年 240～310 万円の給与と賞与、昇給が約束され、福利厚生も充実している
- ⑤ 無期限の支援である。

これらについて、ひとつひとつ考察していく。

《特定地域づくり事業協同組合に対する主観》

① 人材不足地域において、必要なときに、確実な人材（派遣人材）確保することができるのは、よいことだと考える。東栄町 FW の 3 日目に maru-kai の長谷川さんに、とにかく人が足りない、年に 2-3 回でもいいから東栄町に来てくれるだけでも嬉しいという話を聞いた。必要なときに必要な仕事に向かってくれる人材は、地方のためになると思う。

② この制度によって、地方移住のハードルは下がると思う。地方移住、さらにそこで仕事を新しくつくるには、強い覚悟が必要である。強い覚悟がなくてもその地域での仕事を継続的に供給してくれるシステムを利用して地方移住できるのは、地方移住に興味はあっても、新しい地域での仕事に勇気を持ってない人にはいい制度であると思う。しかし、継続的な働き手を確保するには、移住者に定住してもらうことが必要である。定住の覚悟には、生活が確保されることが必要である。この制度の給与で定住の覚悟を得られるかは不明である。

③ 地方移住者がマルチワークを得て、自分のやりたいこと、本業にしたいことを見つけられる場合もあると思う。だのんで生活していた方も現在頼まれた場所で、いろいろお仕事をしているそうだ。例えば、東栄町でパン屋を開く、おにぎり屋を開く、ゲストハウスを開く、というような決意がなくても、地方で仕事をするができることはいいものだと思う。

④ 年 240～310 万円の収入は、地方移住を希望する人にとって魅力的なものであろうか。長野県生坂村では、年収 230～260 万円で、特定地域づくり事業協同組合職員を募集している。年収 250 万円での生活を簡単に調べてみたところ、単身者の 1 人暮らしであれば、節約を意識すれば生活できる金額であるようだ。つまり、この制度は、ものすごく魅力的な収入ではないが、最低限の生活が約束される制度である。しかし、地方移住に憧れを持つ

人で、最低限のお金が安定的に得られるならばいい、と考える人であれば、満足できる制度かと思われた。

⑤ 働き手がほしい地方にとっては、無期限に働いてくれる人材があることはいいことだと思う。また、地方移住を希望する人にとっても、期限なく地方で働く機会を得られるのはいいことであると思う。しかし、無期限が地方にとっても特定地域づくり事業協同組合で働く職員にとっても完全によいものとはいえないと思った。再三申していることであるが、地方移住には覚悟がいることである。田舎はものが手に入りやすく、仕事も少なく、地域との強いつながりを必要とされる。その環境で、新しく生活を始めることは大変である。インタビューを通して、何度か聞いたことであるが、田舎は競争相手がいないだろうという理由で、東栄町で事業をおこす人は続かないことが多いそうだ。田舎でただなんとなく働きたいという人のための施策は、その人にとって本当に優しい対応ではない場合もあると思う。地方にとっても覚悟を持たない働き手がいる場合や、働き手を不必要に感じた場合の責任を負うことはいいことではないと思う。

以上のように、特定地域づくり事業協同組合には地方移住のハードルを下げ、地方移住者を増やすという点においてはよい効果をもたらすかもしれないが、地方移住に必要な覚悟を移住希望者にもたらすかどうかは不明だと感じた。また地方にとっての負担が大きいかどうか、期限が無期限であるため想像がつきにくいと思った。

東栄町 FW で学んだこと、地方移住、地方で働くには覚悟が必要であるということ、地方移住希望者に持ってもらえるようなフォローが必要だと思った。

《御礼》

この FW の設計にあたって、まちプロの椎葉さん、永吉さんがたくさん協力してくださいました。また、東栄町の方がたは、コロナ禍の厳しい状況下で私たちのインタビューや滞在に快く対応してくださいました（東栄町に行く前には、FW 参加メンバー全員コロナの抗原検査をいたしました）。このレポートに書かせていただきました方がた、また、書くことができませんでしたが、私たちにお話をしてくださった伊藤拓真さん、原田さん、山下さん、伊藤さん、ゲストハウスだのんを運営されているあいさん、maru-kai の長谷川さんには特に深く御礼申し上げます。

東栄町 FW で共に活動した学生、榎木先生のおかげで、私はこの FW を無事やりきることができました。この FW に関わった全ての方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。

《東栄町 FW の写真》





《参照》

総務省 リーフレット 「特定地域づくり事業協同組合制度」

長野県生坂村 生坂村特定地域づくり事業協同組合職員募集 (village.ikusaka.nagano.jp)
r030806press.pdf (nagano.lg.jp)

総務省 「特定地域づくり事業協同組合の設立に関する先行事例調査概要版」

東栄町における移住者とまちづくりの関係

人文社会学部国際文化学科2年

204669 山田輝子

はじめに

日本は現在、少子高齢化、人口減少に際しており、特に過疎化の進む地方自治体では、税収入の減少、医療機関、小売、飲食など生活関連サービスの縮小、空き家の増加、地域コミュニティの機能低下など、人口減少がさまざまな影響を及ぼしている。その一方で、新型コロナウイルス感染症拡大に伴うテレワーク経験等を踏まえて地方移住への関心が高まっている¹。

そのような中、2021年11月12日から11月14日までの3日間、愛知県北設楽郡東栄町にてフィールドワークを行った。東栄町は豊かな自然、花祭りを中心とした歴史ある文化、温かい住民の人柄や、人と人との繋がりなど、その魅力を活かし、暮らしやすく住み続けられる町づくりが行われている。(写真1) 今回の東栄町への訪問は、過疎地域ならではの支え合い文化や、関係性の深さを知るとともに、移住者とまちの関わり方と、過疎地域の新たな魅力について考えるきっかけになった。

本稿では、最初に東栄町の概要と移住定住の現状を述べ、次に実際に東栄町で行った調査および東栄町のフリーペーパー「東栄町のじかん」を分析する。それらを通し、東栄町と移住者の関わり方の現状を伝えることを主な目的として報告する。



(写真1) 町内の様子

東栄町の概要

¹ 総務省「地方への人の流れの創出」に向けた効果的移住定住推進施策事例集

1. 東栄町の基礎情報

東栄町は愛知県の東部、北設楽郡の南東部に位置し、東は静岡県佐久間町、西は北設楽郡設楽町、南は新城市、北は北設楽郡設楽町及び豊根村に接している²。総面積は 12,334 ヘクタールでそのうちの 90.8%が森林・原野である。標高 1016 メートルの明神山をはじめ、700 メートルから 1000 メートル級の山々が連なっている。また、町の中央部には天竜水系の大千瀬川が流れており、水がきれいであるため 6 月半ば頃から 7 月半ばまでホテルを観光することができるほか、良質な鮎がとれる。さらに、国の重要無形民俗文化財に指定されている花祭をはじめとして、伝統芸能や祭り、史跡が残っている。

2. 東栄町の移住・定住の現状

1) 東栄町の人口動態

国勢調査（令和 2 年）によると人口は 2942 人、1294 世帯で、昭和 30 年以降、減少が続いている。平成 27 年時点で、65 歳以上の人口が最も多く、高齢化率は 48.8%である。2006 年から 2020 年の人口動態をみると、転出者数が転入者数を上回る、もしくは同数である年が多いが、2013 年、2019 年には、転入者数が転出者数を上回る社会増がみられ、移住定住政策が一定の成果を出していると評価されている³。

2) 東栄町の移住定住促進への取り組み

移住定住支援は、「居」住まいの情報、「職」職業の情報、「充」充実した生活、の 3 つが柱になっており、具体的な内容としては、空き家等情報活用制度、移住者通勤支援補助金、子育て支援などが存在する。これらの取り組みは、地域振興課を中心に、東栄町第 6 次総合計画⁴の一部である第 2 期総合戦略のもとで行われていることから、まちづくりの一環に位置づけられていると考える⁵。

東栄町での調査

1. 調査の概要

² 東栄町勢要覧 資料編 2020

³ 第 2 期東栄町まち・ひと・しごと創生総合戦略 令和 2 年度～令和 6 年度（2020 年度～2024 年度）22 ページ「人が人をつなぐ町 事例紹介」より

⁴ 総合計画は、東栄町に関わる人々がお互いのことを認め合い、協力してまちを良くしようという思いを共有することで、幸せに暮らすことができるまちづくりを行うため、東栄町のまちづくりに関する基本的な考え方やルールなどを条例化した、まちづくり基本条例を踏まえ、長期的かつ計画的にまちづくりを行うための計画である。

⁵ 総合戦略は、総合計画の一部に位置づけられている。令和 2 年度～令和 6 年度(2020 年度～2024 年度)の第 2 期は、東栄町が将来にわたって賑わいを保ち続けるまちであるために、地域内経済を活性化させ、産業と暮らしの循環により暮らしやすいまちづくりを行うことを目的とする。

今回のフィールドワークでは、事前に町役場のホームページや東栄町観光協会のウェブサイト、東栄町在住のまちプロの方から得た情報を基に、調査の対象者を決定し、事前にアポイントメントを取った上で、自宅や職場にてインタビュー形式で聞き取りを行ったほか、町役場にて地域振興課の担当者の方から東栄町のまちづくりについて伺った。また、町内を移動中に会った方や、訪問時に開催されていた花祭展に訪問した際に会場にいた方、インタビュー中に来店された東栄町外の方にもお話を伺うことができた。(写真 2)



(写真 2) 実際のインタビュー調査の様子

2. 地域ソムリエについて

事前調査では、東栄町に移住者が多いことに着目し、特に、移住定住促進のための「移住ソムリエ」という制度に興味を持った。この制度は、地域振興課が町への移住希望者などに気軽に移住や東栄町での暮らしについて話ができる人を「移住ソムリエ」として認定し、町民とのコミュニケーションを通じて移住につなげることを目指すものである。人口減少が進み、集落の機能が失われつつあるなかで、移住者を迎え入れみんなでまちを作っていく、その思いを行政と町民、または町民同士が共有し、移住者を「仲間」として増やしていくきっかけになることが期待されている。東栄町が大好きであること、東栄町の暮らし・移住の話ができること、東栄町に暮らしていること、の 3 つの条件を満たせば、個人、店舗、団体を問わず誰でも移住ソムリエに登録することができるようになっている。(写真 3)



(写真3) 移住ソムリエに認定されるとステッカーが配布される

このような事前調査のもと、東栄町への移住者と、移住ソムリエに登録している人を中心にインタビューを行ったが、地域振興課担当者と、移住ソムリエ認定者への聞き取りから、現状では、地域ソムリエが実際に移住希望者と話をする特定の場所が設けられていたり、地域振興課と連携してなにか「仕事」をしたりすることはないと分かった。ただ、移住者のなかには、友達や知り合いが東栄町に移住したのをきっかけに移住を決めた人がいた。東栄町ではこのような動きを、第2次総合戦略の中で「移住者が次の移住者を呼ぶ、というサイクルが起きていた」と紹介しており、移住ソムリエがこのサイクルを回す担い手になると考えていると感じた。

一方で、実際に移住ソムリエに認定されている移住者の話を聞くと、「認定されているだけでなく、なにか役割が欲しい」という意見や、「移住ソムリエが今後なにをすればよいか分からない」「移住について話を聞かれたらもちろん話すつもりだが、自分から話すことはないだろう」との意見も見られ、移住ソムリエが単なる認定だけでなく、実用されていく必要があるようだった。

3. 移住者とまちづくりー「東栄町のじかん」

調査を進めるなかで、移住ソムリエの他にも移住者とまちづくりに関係性がある事例が存在することが分かってきた。東栄町観光まちづくり協会が発行しているフリーペーパー「東栄町のじかん」である。創刊号は2020年7月31日に発行されており、2021年末時点で全7号発行済みである。町内のパン屋や雑貨屋、カフェなどに置かれ、誰でも持ち帰ることができるようになっている。

第1面には季節の話題と、それに関連する店や施設が紹介されており、第2面は東栄町のグルメや町民へのインタビュー、町内で開催される行事の紹介が載っているほか、「まちの暮らしとこんな場所」「こんな人こんな場所」と題して町内の宿や神社、郵便局などが人物紹介とともに載るコーナーがある。同様に、「まちの NEW SPOT」には町内に新しくで

きた店や事業所の紹介がされている。第3面には2021春号までには「INTERVIEW」のコーナーがあり、それ以降は「THIS IS TOEI-CHO」のコーナーが設けられている。第4面は食事処、観光スポット、カフェ、撮影スポットがまとめられた観光マップになっている。東栄町の豊かな自然に関係する季節の話題はもちろん、地域の伝統ある花祭や、郷土の味について知ることができる。東栄町の町民の暮らしがインタビューや事業紹介で深く掘り下げられているので、「暮らすように楽しむ」とつけられた副題の通り、旅行者にとっては東栄町の暮らし自体が魅力的に映るような内容である。さらに、「まちの暮らしとこんな場所」「こんな人こんな場所」のコーナーには子どものバンド練習場や、郵便局などが紹介されており、町民が利用する施設の魅力が再発信されているようだった。

フィールドワーク中、「東栄町のじかん」を発行している東栄町観光まちづくり協会の方に話を聞く機会があり、企画・取材・原稿・撮影を行っている方も、デザイン制作を行っている方も移住者であることを知った。元々、観光まちづくり協会の活動紹介をする会報誌はあったが、移住者のなかにデザインや原稿を作成することのできる人がいたことをきっかけにフリーペーパーが発行されることになったようだ。

さらに、観光まちづくり協会の方によれば、「東栄町のじかん」は「内へ向かっての広報」でもあるという。東栄町の施設や店、グルメ、伝統文化、歴史の魅力は、町民自身も知らなかった場合も多く、それらを、東栄町に訪れた人だけでなく、元から東栄町に住む地元の人とも共有する目的がある。

現在、東栄町では、移住者を中心に、新しい事業が次々と誕生しており、「東栄町のじかん」でも、移住者が開いた店や、その人自身の暮らし方が紹介されている。移住してきた経緯や、時期まで紹介されていることもある。このフリーペーパーが「内への広報」でもあることを念頭に置くと、彼らの職業や暮らしは、町民にとっても、町外の人にとっても町を豊かにする魅力として紹介されているのだと気づく。「東栄町のじかん」の役割とは、東栄町に元からある魅力と、新しくできた、もしくは新たに見つけられた魅力を、町民にも町外の人にも広く周知することにあるのではないだろうか。

おわりに

東栄町での調査を通じて、様々な人や団体や店が、町の魅力を生みだしていることが分かった。特に、移住者を「よそ者」としてまちづくりから排除するのではなく、彼らならではの視点や人脈を活かすなど、東栄町が豊かになるために必要な「仲間」であると位置づけていることが、過疎地域のまちづくりには重要であると学んだ。

今回の調査では、実際に足を運ぶことで、統計には表れない、人々の暮らしぶりや、まちに対しての思いを知ることができた。また、東栄町では人と人の繋がりが深く、調査対象者同士が顔見知りであることも多かったのに大変驚いた。一方で、主な調査対象者が移住者であったため、東栄町で生まれ育った方の話を聞けず、東栄町が移住定住に積極的に取り組むようになる以前の様子を知ることができなかった。

地域に残る伝統と、移住者がもたらす新たな魅力が混在する東栄町は、様々な立場の住民がそれぞれの暮らしを営んでいる。東栄町のフリーペーパーは、彼らの魅力を町内外に発信する役割を担っていた。それぞれがそれぞれの強みを活かして、暮らし続けられる町こそが、まちづくりで目指されるべき姿であるのではないだろうか。

【参考資料】

・東栄町のじかん 東栄町観光まちづくり協会発行 2020 夏～Vol.7 2020

【参考ウェブサイト】

・総務省「地方への人の流れの創出」に向けた効果的移住定住推進施策事例集（2020 年 12 月 26 日閲覧）：

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/chiho_iju.html

・東栄町勢要覧 資料編 2020（2020 年 12 月 26 日閲覧）：

<http://www.town.toei.aichi.jp/secure/1116/2020tyouseiouran.pdf>

・第 2 期東栄町まち・ひと・しごと創生総合戦略 令和 2 年度～令和 6 年度（2020 年度～2024 年度）（2020 年 12 月 26 日閲覧）：

<http://www.town.toei.aichi.jp/secure/4066/senryaku.pdf>

・久保まり子「フリーペーパーとは何か？」、情報の科学と技術、2013 年 63 巻 10 号（2021 年 12 月 30 日閲覧）

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jkg/63/10/63_KJ00008828977/_pdf/-char/ja

2021年度 国内フィールドワーク報告書
204329 杉山斗優子

愛知県東栄町における「移住ソムリエ」制度の現状と課題

～移住者のもたらす影響を探る～



名古屋市立大学 人文社会学部 現代社会学科 2年
204329
杉山斗優子

1. はじめに

1)調査目的

昨今、日本の急速な人口減少と少子高齢化の進行に対し、危機感が一層強まっている。特に地方の山間部においては、林業や農業など産業の衰退とともに、町村の存続も危ぶまれる問題が山積している。地域の衰退の波が深刻となり、日本で常態化していくなかではあるが、時代の流れとして仕方ないと諦めてしまえば、自然をはじめとした地域資源の放置に繋がるだけでなく、紡がれた地域の文化・歴史を途絶えさせることになる。地域の魅力を今後も繋いでいくためにどのような取り組みができるのだろうか。医療の発達、働き方の変化などにより自然人口の著しい増加は見込めないであろう今後、いかにして地域に人を呼び込むのか。ただ呼び込むだけでなく、地域を好きになってもらい、持続可能的に盛り上げ存続させるにはどうすればいいのか。

本調査では、高齢化率が50%を超え、増減率が例年2~4%で推移しながら人口減少をたどる愛知県東栄町をフィールドにする。東栄町においては、空き家バンク制度や補助金による支援、移住希望者などに気軽に移住や暮らしについて話ができる人を認定する「移住ソムリエ」など、移住・定住に関する仕組みが様々である。それらの施策はどのような効果をもたらしてきたのか。

日本全国で増えている、今後も増え続けるであろう少子高齢化・人口減少が大幅に進んだ自治体が存続していくために何ができるのか、東栄町の事例を通して考えていきたい。

2)調査対象及び方法

東栄町の住民・行政が、移住者をどのように受け入れているのか、また、移住者の移住した経緯や理由、移住後の生活はどのようなものか。そしてそれらの人の営みが東栄町にどのような変化をもたらしているのか。これらを問うために、本調査では生活史調査を行った。

以下の方々に調査への協力をしていただき、2021年11月12~13日にかけてヒアリングを行った。

～対象～

伊藤氏 東栄町観光まちづくり協会

大脇氏 NPO法人「てほへ」 副理事長

尾崎氏 東栄町役場 地域振興課

瀬頭氏 2020年東栄町へ移住 2022年飲食店開業予定

「杏の家」さん 店主

「ピッコロパン屋」さん ご夫婦

東栄町の“移住”にまつわる施策、住民の方々の生活、個人の考えや思いから、日本の過疎地域における、移住促進によるまちづくりの可能性について考察していく。

2. 東栄町の概要

愛知県の北東部、北設楽郡の南東部に位置し、総面積の約9割が山林の自然あふれるまちである。町の東端は静岡県に接している、名古屋駅からは電車で約2時間、車で約2時間、静岡県浜松方面からは車で約2時間のところにある。

東栄町の歴史は古く、縄文時代前期の遺跡が残っていることも確認されている。東栄町の“花祭”は約700年続いており、国の重要無形民俗文化財にも指定されている。日本全国にファンが訪れる伝統的な祭りであり、世代を超えて愛される奇祭である。最近では、新たな地域資源として、チェンソーアートや国内で唯一、採掘されるセリサイト（ファンデーションなどに使用される）にちなんだビューティーリズムなど、新たな潮流も見られる。

明治以降、馬、養蚕、木材の産地として時代の要請にもこたえ、林業を主産業としていた。しかし、木材市場が縮小するとともに職を失った人々の町外流出も顕著になり、まちをつくる担い手の減少が危惧されている。現在は人口が町全体で3000人を切り、まちをつくる担い手不足が危惧されている。

3. 人口減少から移住・定住施策の強化へ

1) 東栄町の現状と将来イメージ

人口は、1980年時の約6200人から2020年には半数の約3100人となり、40年の間に半減していることがわかる。さらに東栄町の算出した人口の将来展望によると、20年後の2040年には2259人になると予想している。このように人口が顕著に減少していくなかで、東栄町は以下の基本理念を掲げている。

「豊かな自然環境、古から伝承される歴史や伝統文化、住民の温かく素朴な人柄、これらが本町の特徴であります。これら地域の財産を生かし、住民同士が互いに助け合いながら、過疎地での暮らしを営んでいます。こうしたまちを住みやすいと感じ、今後も住み続けたい、訪れたいと思えるまちとしていくため、町民みんなが力をあわせ、本町の特徴を最大限に生かして、みんなが幸せを実感できるまちを育んでいきます」

このような理念のもと、住民の協働・共助のまちづくりを進めることで、幸せを実感できる最先端の田舎になることを目指す、としている。



図1：第6次総合計画後期計画 基本構想

役場が空き家所有者と利用希望者の仲介役となった（空き家バンク）、役場が空き家を発掘して改修を行い、入居希望者を募集・決定し、希望者のフォローを進める（定住促進空き家活用住宅整備事業）といった、手厚いサポートによって移住への不安や障壁はかなりちいさくなっているのではないかと。神奈川県から移住し、空き家を改装した飲食店の開業を目指す瀬頭さんは、震災をきっかけに生き方を考え、自然豊かなところで自ら自分の生活を組み立てるという幸福のかたちがあり、規模の小さいまちには、無駄の出ない効率のよさとストレスの少なさによる快適さがあると思う、と語った。役場の尾崎さんと空き家に関する相談をし、2年後の開業を目指しているという。

また、移住者と東栄町の交流を移住前から深められる仕組みとして、「移住ソムリエ」という独自の制度を設けている。移住ソムリエ認定の条件は、①東栄町が大好き、②東栄町の暮らし・移住の話ができる、③東栄町に暮らしている（関係人口でも可）の3つである。移住ソムリエが増えることによって、町全体で移住者を迎え入れる体制ができること、移住希望者の不安が解消されること、移住後の交流も充実が図れるという効果がある。理念として協働を掲げる東栄町で、地域で一緒に暮らす仲間をつくるための移住者にとっての大きな一歩となる仕組みである。



さらにこの理念のもと、左記の7つの基本目標を掲げている。今調査では基本目標6に触れていきたい。

最先端の田舎になるためには、人口の社会減少を食い止め、社会増加にも対応できるまちをつくっていく必要がある。

「移住を促進するばかりではなく、暮らし続ける人を支える仕組みが必要である」と尾崎氏は言う。

暮らしていくのに欠かせない住まいに関する施策では、空き家バンク制度、定住促進空き家活用住宅整備事業、若者定住奨励金などがある。特に定住促進空き家活用住宅整備事業が始まった平成24年から3年間は、転入人口よりも転出人口が上回っていたそれ以前と傾向が変わったという成果を上げた。

2)移住ソムリエの認定を受けている方々

～ピッコロパン屋さんの場合～

関東のベットタウンから移住し、東栄町で「ピッコロパン屋」を営むオーナーは移住ソムリエとして認定を受けている。東栄町との関わりに関しては、奥様のご実家が東栄町近隣の都市にあったことがご縁となり、9年ほど前に別荘として家を購入し、そのころから交流が始まった。定年退職後に増えた自由な時間でパン教室に通い、老後の楽しみとして、また、交流のあった東栄町の若者から「東栄町にはパン屋がない」と言われていたことも、パン屋開業きっかけだったという。実際に移住する前の家を買った段階から東栄町の住民との交流が盛んだったオーナーは、東栄町のまちづくりについて考え話し合う、「まちづくり座談会」の実行委員でもある。

そんなピッコロパン屋のオーナーは、移住ソムリエについて、現実的な活動が難しさを感じているという。まちづくり座談会に関しても、制度や機会はあれど打ち上げ花火的になってしまうことへの危惧や、具体的な行動の必要性について考えることが多いという。東栄町のまちづくりについて考えるなかで町内のおもしろい動きは広く知られていなくとも意外とあることを認識し、その動きをしっかりと伝えることが地域の良さを知り好きになることに繋がるのではないかと話す。行政の負担ばかり大きくなるとできることも限度があるため、ステッカーもあり存在周知しやすいソムリエをつかって移住者に限らず東栄町への興味を持ってもらえるようなことができるのではないかといいのではないかと、という。

～杏の家さんの場合～

2020年、隣町から地区70年ほどの空き家だった物件にご夫婦で移住し「杏の家」というパン屋を営むオーナーも移住ソムリエに認定されている。元々は関係ないサラリーマンをしていて、体調を崩したことをきっかけに、スローライフ、密なコミュニケーションの取れる田舎での暮らし、といった理想の暮らし方、またパン・菓子が趣味である奥様と一緒に夢をかなえるために東栄町に移住したという。空き家を見つけたのは知り合いから空き家バンクを教えてもらって登録し、尾崎さんなどとも相談して決めたという。東栄町がビューティーツーリズムなどで「美のまち」というイメージがあったことがアートの好きなご主人のコンセプトが近く、移住に関するサポートが多かったことなどが東栄町での開業の決め手になったという。

自身がサポートしてもらった恩返しの意味も含め、尾崎さんやゲストハウス danon の金城さんとの交流から得たものを移住希望者にも感じてもらえるならと、認定を受けたという。ステッカーがお店に貼ってあることから話が広がっていくこともあったりするため、「移住ソムリエである」ということでなにか新しいコミュニケーションが生まれるようなことがあるのではないかと話す。オーナーは、「東栄町に元からいた人には敵わない」と話し、交通の便などは悪くなるため「来て来て！」とは言いづらいが、あくまで自分の目線で、外から来た人の目線を伝えられるといいと思う、という。

4. 総括と考察

「人が減ってるのに飲食店は増えていくんだよね」と笑っていた住民の話聞いて不思議に思っていたが、移住定住の施策の充実、他地域からの移住者をのけ者にするような風潮がなく地域の人とのコミュニケーションをとる機会が多い、地域の繋がりが密にあることなどが、この地域へ移住し開業をする際の決め手になるのではないかと感じた。中でも特異的な魅力は、役場の手厚いサポートと、移住してきた人がまちづくりを本格的に担っていて、交流を持てるところではないだろうか。今調査で聞いて回った移住者の人からは、尾崎さん、danon の金城さんをはじめとして、共通の名前が挙げ移住のサポートについて話していた。距離感の近さや密な連携は人口の少なさによるものでもあるだろうが、まちづくりに積極的な人のいきる東栄町だからこそではないか。

「移住ソムリエ」制度に関して調査を進めるなかで、東栄町はまちづくりの担い手の宝庫だと感じた。条件は簡単な 3 つのもので認定される移住ソムリエでは、住民側の参画のハードルが低く、また、移住者との交流になり今後のより濃い住民の関係づくりにもつながるであろう。今調査から見えた今の制度の現状では、認定を受けた人たちの力をフル活用できていないのではないことが課題ではないか。「自分の住むところが好きだ」という意思表示を役場に知ってもらう、とも言え換えられるこのシステムは、ソムリエ側に自分が地域のことに参画しているという認識を与え、協力の姿勢を示している証明にもなる。移住ソムリエの方々のお話を聞き、ソムリエ同士の交流機会を設け、東栄町のために、と認定申請した人たちの動きが大きくなれば、東栄町に新たな大きなインパクトがもたらされるのではと考えた。

東栄町の目指す地域の協働は、移住してきた後も、地域に愛着を覚え心豊かな生活を営むために非常に重要なポイントになるであろう。日本のどの地域においても、住民・移住者・役所の人々がコミュニケーションをとり地域全体が連携することによって、それぞれの動きが見える、刺激を受け新たな動きが起こる、というまちを巻き込むムーブメントが起こるのではないだろうか。

5. 参考

井戸聡「移住・定住に関する公的サポートについての意識調査 ―愛知県の条件不利地域における定住意向―」2021 年、愛知県立大学大学文化財研究所紀要

樋下田邦子「東三河中山間地域における地方創生に関する研究 ―新城市、設楽町、東栄町の事例から―」,2017 年、岐阜経済大学論集 50 週 3 号

資料: 東栄町「第 2 期 東栄町人口ビジョン (2020 年度~2024 年度)」,2020 年 3 月

(<http://www.town.toei.aichi.jp/secure/4066/bijon.pdf>)

「第 6 次総合計画後期計画(令和 3 年度~7 年度)」

2021 年度 国内フィールドワーク報告書

204329 杉山斗優子

(http://www.town.toei.aichi.jp/secure/1115/dai6zi_soukei_all.pdf)

「東栄町勢要覧」,2016

(<http://www.town.toei.aichi.jp/secure/2938/2016youran.pdf>)

「自然」「地縁」という東栄町の豊かさは子育てにいかされているのか
～「子育て中の親」の視点から東栄町をみる～

心理教育学科 4年 204251 石井友香

はじめに

子どもや子育てを取り巻く環境への危惧が言われるようになって久しい。

平成 17 年 1 月 28 日中央教育審議会の答申である「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について」の中では、「地域社会の教育力の低下」や「家庭の教育力の低下」が指摘され、それらが子どもの育ちに影響を与えているとされている。

少子化や核家族化、都市化、情報化、国際化などを背景に、社会の傾向として「人間関係の希薄化」「地域社会のコミュニティー意識の衰退」「過度に経済性や効率性を重視する傾向」「大人優先の社会風潮」がみられるようになり、それらが「地域社会の教育力の低下」や「家庭の教育力の低下」を引き起こしているというのである（文科省 2005）。

「地域社会の教育力の低下」とは、つまり、地域における子ども達の育ちの機会が減少していることを指し、子ども同士が集団で遊ぶ機会の喪失や、自然やひろばなどでの遊びからテレビゲームやインターネット等の室内遊びへ変化したことによる遊び体験の偏り、地域の大人との関わりの減少などがその要因として挙げられている。

一方、「家庭の教育力の低下」とは、つまり、様々な心理・社会的な要因によって、子育てに対する考え方や家庭における子育て状況が変化したことで、家庭での子育てが困難なものとなっていることを指す。ここでは、一つの要因として、「核家族化」や「地域における地縁的なつながりの希薄化」が、親の孤立感を募らせ、親を情緒不安定にさせることを挙げている。

この答申から 15 年以上経過した現在においても、子どもの遊び環境の問題や、地域における地縁的なつながりの希薄化等を背景とした子育て世帯の孤立化は、子どもの育ちや家庭の子育てに影響を与える要因として引き続き問題視されており、様々な取り組みがなされている。

例えば、子どもの遊び環境の問題に対しては、先進的に自然環境や地域交流を取り入れている保育・教育施設が存在し（宇都宮 2021、学校法人茂来学園ほか）、また冒険遊び場（プレイパーク）や森のようちえんなども広がりを見せている。県を挙げた取組もみられ、例えば、長野県の「信州型自然保育認定制度」は、森と自然を活用した保育と幼児教育の推進を図る取組であり、いくつかの自然豊かな県においても同じような取組が行われている（長野県、広島県、鳥取県ほか）。

一方、子育て世帯の孤立化を防ぐための取り組みとしては、子育て世代同士の交流を目的とした地域子育て支援拠点事業や、子育てサロン、子育てサークルなどがあり、また、世代間の交流を目的とした幼老施設や多世代交流施設のほか、地域交流拠点として広がりを見せているコミュニティサロンやこども食堂などが挙げられる。また、地域における育児の相互援助活動を推進することを目的として、行政等が、育児の援助を受けたい者（依頼会員）と育児の援助を行いたい者（提供会員）との仲介を行う、子育て援助活動支援事業（ファミリー・サポート・センター事業）も行われている。

このように、地域や家庭において失われつつあるとされる子育て・育ちの機能を補うために、現在では様々な取り組みが展開されているのである。

そんな中、東栄町では、「笑顔でつながるまち とうえい」を基本理念として、「子ど

も・子育てを通じて、すべての人が幸福や喜びを感じながら、希望をもって生活できるまち」が目指されている（東栄町）。これは「第2期東栄町子ども・子育て支援事業計画」の中で示されている指針であるが、筆者は今回、その中に明記されていた「東栄町の自然や地域のつながりを最大限生かし」という文言に着目した。

地方であればあるほど、「ご近所付き合いが色濃く残っていて、町に住む人はみな知り合いであり、何かあれば助けてくれる」「自然豊かな環境が身近にあって子ども達も自然の中で遊んでいる」というようなイメージを抱く人は少なくないのではないだろうか。そして、世間一般では、子どもの遊び環境の問題や、地域における地縁的なつながりの希薄化が問題視されている中で、東栄町には「自然や地域のつながり」が豊かに存在するのであれば、東栄町における子育ては、一般的に語られている子育ての様相とは異なるのではないだろうか。

そこで、本調査では、筆者の個人的な立場でもある「子育て中の親」の視点で町内の観察を行い、東栄町の地域性を実際に体感しながら、「『自然』『地縁』という東栄町の豊かさは子育てにいかされているのか」という問いを基に、探索的にフィールド調査を実施した。

1. 東栄町の概要

東栄町は、愛知県の東北部、奥三河に位置している。町内には700mから1,000m級の山々が連なり、その中を縫うように大千瀬川や奈根川が流れ、深い谷を刻んでいる。集落はこの川沿いの平地や緩斜面に点在している。大千瀬川東端の遠州境が標高170mの最低地点であり、そこから15kmの距離内において標高差が850m近くもあるほど、町内は急峻な地形となっている。（東栄町HP）。

町内には、ハイキングコースとして人気が高い明神山の他、愛知県のポットホール指定第1号である煮え淵ポットホール、柿野川の釜淵ポットホールなどの自然観光スポットが点在し、夏には大千瀬川流域において、夜空を舞う蛍を楽しむことができる。また、町西部の一部は、愛知県立振草溪谷自然公園に、静岡県との県境付近の一部は天竜奥三河国定公園の指定を受けている地区もあり、豊かな自然が身近にある環境といえる。

主な産業は、三河杉を中心とした林業と、プロイラーと茶の生産を中心とした農業、花祭やとうえい温泉を中心とした観光業である。この花祭は、700年以上続く伝統的な神事で、1976年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年11月から3月に市内11か所（内1か所は現在休止中）で、各地区総出で行われるため、世代を超えて、またさらには地域を超えて人をつなぐ役割を担っている。

東栄町でも、他の中山間地域と同様に、総人口は年々減少傾向で、2021年4月1日時点では、総人口2,990人となっている。また少子高齢化も進んでおり、その内訳は0～15歳人口は269人（9.0%）、65歳以上の人口は1,499人（50.1%）となっている（東栄町HP）。

2. 東栄町の子育ての現状

ここでは、東栄町における子育ての現状を理解するために、東栄町ホームページや第2期東栄町子ども・子育て支援事業計画で示されていた子育て世帯の現状とニーズ調査の結果について、特に地域におけるつながり、つまり育児ネットワークという観点から概観する。

第2期東栄町子ども・子育て支援事業計画の中で示されていた国勢調査結果によると、

平成 27 年の 18 歳未満の子どもがいる世帯の世帯構成は、核家族世帯が 52.6%、それ以外の世帯が 47.4%となっており、ひとり親世帯は 8 世帯 (4.7%) となっていた。

また、2006 年から 2020 年までの出生数は、最も少ない年で 9 人、最も多い年で 23 人となっており (東栄町 HP)、例えば、平成 30 年における 3,4 か月児、9,10 か月児、1 歳 6 か月児、2 歳児、3 歳児のすべての乳幼児健診の受診率が 100%であり、平成 26 年から 30 年度の経年平均でも 97%と高い受診率となっていたことから (第 2 期東栄町子ども・子育て支援事業計画: 28)、子育てに困難を抱えやすいひとり親世帯や乳幼児がいる世帯であっても、母子保健担当者とは、顔の見える関係性になりやすい状況が推測された。

一方、子育て支援事業の利用状況をみると、就学前の定期的な教育・保育事業の利用の有無では、「利用している」が 62.1%、「利用していない」が 32.9%となっていた。ただし、3 歳児になるとほとんどの幼児が入園する (第 2 期東栄町子ども・子育て支援事業計画: 22) とのことから、「利用していない」人の内訳は、3 歳未満児で未就園の子どもであることが推測された。

そこで、次に、主として概ね 3 歳未満の児童及び保護者を対象とした地域子育て支援事業の利用状況をみてみると、「利用していない」が 51.9%と最も多く、次いで「利用している」が 44.4%、「その他当該自治体で実施している類似の事業」の利用者が 3.7%となっており、半数以上が地域子育て支援事業を利用していないことがわかった。

しかし、上述のとおり、母子保健事業における 3,4 か月から 3 歳までの乳幼児健診の受診率が高いこと、そして町内に 1 か所ある保育園にほとんどの幼児が 3 歳になると入園するという点を踏まえると、東栄町では、母子保健事業から保育事業へ、多くの親子が行政の支援に継続的につながることができる状況にあることが推測された。

なお、市内には、子育て世帯に関わる施設として、子育て支援センター (子育て世帯包括支援センター)、保育園、小学校、放課後児童クラブ、中学校が各 1 か所設置されており、一方、幼稚園やこども園、高等学校が町内に存在しないということから、町内に住むすべての子どもとその親が、各子育て期ごとに 1 か所の施設に集まり、子どもの年齢と共に活動の場を移しながら付き合いを深め、中学校卒業を機に、様々な場所へ分散していく状況が推測された。

続いて、インフォーマルな育児ネットワークの状況について概観する。

ニーズ調査の結果、「日頃、子どもをみてもらえる親族・知人の有無」については、小学生の親の場合、①「日常的に祖父母等の親族にみてもらえる」が 44.4%、②「緊急時もしくは用事の際には祖父母等の親族にみてもらえる」が 39.7%、③「緊急時もしくは用事の際には子どもをみてもらえる友人・知人がいる」が 15.9%、④「いずれもない」が 0.0%となっていた。これに対して、就学前の子どもの親では、①が 26.5%、②が 50.0%、③が 14.7%、④が 8.8%となっており、8.8%の人が、緊急時や用事があった場合であっても、子どもをみてもらえる人が身近かにいないことが示されていた。

また、「祖父母等の親族に見てもらっている状況」を尋ねた質問については、「祖父母等の親族の身体的・精神的な負担や時間的制約を心配することなく、子どもをみてもらえるため安心している」と回答したものが、小学生の親で 39.4%、未就学の子どもの親で 40.0%であったのに対して、預け先の負担に対する心配や預けることへの心苦しさ、預ける環境への不安などを感じていたものが、小学生の親では 59.1%、未就学の子どもの親では 59.9%となっていた。

同様に「友人・知人に見てもらっている状況」を尋ねた質問では、「友人・知人の身体

的・精神的な負担や時間的制約を心配することなく、子どもをみてもらえるため安心して」と回答したものが、小学生の親で20.0%、未就学の子どもの親で22.2%であったのに対して、何らかの不安や心配を感じていたものが、小学生の親で53.4%、未就学の子どもの親で77.7%となっていた。

以上の結果から、未就学の子どもの親の中には、身近に子どもを預けられる人がいない人が存在すること、また、小学生の親、未就学の子どもの親ともに、例えば子どもを預けられる人がいたとしても、半数以上の人が子どもを預けることに心配や不安を感じていることが示されていた。

3. 調査方法

今回のフィールド調査は、2021年11月12日（金曜日）13日（土曜日）の2日間という限られた日数の中で、振興課職員の説明以外は、特に事前の予約等は行わず、探索的に実施し、基本的には、その場で出会った方々から話を伺った。

一日目は、まず子育て支援情報に関するチラシ等を得るために東栄町役場に赴き、その際に住民福祉課職員から子育て支援情報や町内の遊び場に関する話を伺った。続いて、東栄町役場から子育て支援センター「にこにこ広場」までの往復と、また東栄町役場から中学校までの往復の道のりを、徒歩にて移動しながら観察を行った。その後、東栄町振興課職員から「移住定住」「のき山学校」を中心とした業務内容に関する説明を受け、東栄町役場からのき山学校まで車で移動し、のき山学校の施設内を見学した後、徒歩にてのき山学校からとうえい健康の館まで移動した。その間に東栄町民のまちプロスタッフからの紹介を受けて、移住者であり子育て中の親であり、そして外遊びに関する様々な取組みを行っているご夫婦から、ご夫婦の取組や東栄町の子育てに関する話を伺った。また、宿泊先であったとうえい健康の館職員で東栄町出身の方2名からも、幼少期の遊び環境や孫世代を取り巻く環境等に関して話を伺った。

二日目は、とうえい健康の館から、前日の調査協力者から紹介された平岩の川遊びスポットまで、徒歩にて移動しながら観察を行い、その間に声を掛けられた下田地区在住の男性から、遊び環境等の話を伺った。その後、大千瀬川沿いのホテルの散歩道を散策し、東栄中学校、東栄小学校、とうえい保育園を回った後、そのまま徒歩にて花祭会館まで移動して花祭会館内の見学を行い、最後に東栄駅で出会った、名古屋市からの移住者であり、元保育士の女性から東栄町の遊び環境について話を伺った。

4. 調査結果と考察

（1）子どもの遊び環境の実際

東栄町では、町の概要にもあったように、生活圏の間近に山々があり（写真①②③）、小中学校や保育園、子育て支援センターの校庭・園庭から見渡せる景色も、広く開けた空や山々の緑がとても美しく（写真④⑤⑥⑦）、自然豊かな風景が広がっていた。



①山が間近にある景色



②山が間近にある景色



③山が間近にある景色



④中学校校庭からの景色



⑤小学校校庭からの景色



⑥保育園園庭からの景色



⑦子育て支援センターからの景色

また、例えば中学校の通学路（写真⑧⑨）のように、日々の生活の中にも自然や季節の移ろいを感じられる環境が身近にあり、今回の限られた調査内であっても、自然の色の美しさに目を奪われたり（写真⑩⑪）、静けさの中で、川のせせらぎに聞き入ったり（写真⑫）、1cmほどのどんぐりが木から落ちる音に驚くなど、五感を心地よく刺激されるような自然に度々触れることができた。



⑧中学校通学路



⑨中学校通学路



⑩美しい緑



⑪川底のコントラスト



⑫木々の奥の川のせせらぎ



⑬山の小径



⑭川辺の岩場



⑮砂地と動物の足跡

そして、子ども達がいれば、探検したくなるような山道や岩場、砂地、水辺など（写真⑬⑭⑮⑯）があり、水、落ち葉、どんぐり、石などの素材（写真⑰⑱⑲⑳）も多く確認さ

れ、昆虫や動物の足跡も見つけることもできた（写真⑳㉑㉒㉓）。



㉐水辺



㉑素材：水



㉒素材：落ち葉



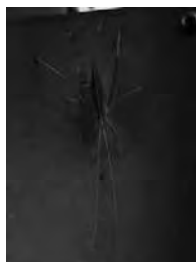
㉓素材：どんぐり



㉔素材：石



㉕昆虫：イトトンボ？



㉖昆虫：馬追

このように、今回の限られた調査範囲内であっても容易に見つけられるほど、東栄町には、子ども達の遊び環境として豊かな自然が溢れていることが確認できた。

しかし、それにもかかわらず、調査協力者の方々の話からは、東栄町の豊かな自然が、子ども達の遊び環境として十分にいかされていない可能性が示唆された。つまり、東栄町の子ども達が、身近にある豊かな自然の中で十分に遊べていないのではないかという疑問が提起されたのである。

移住者であり子育て中の親であり、そして外遊びに関する様々な取組みを行っている調査協力者のご夫婦からは、ご夫婦がされている取り組みや東栄町の子育て世帯の印象、東栄町の遊び環境などについて、以下のような話を聞くことができた。

東栄町で遊ぶ機会を作りたくて、森のようちえんを始めた。興味を持ってくれる人はいて、設楽町や豊根村からも来てくれる。子どもは自然の中にいれば、大人が何もしなくても遊ぶことができる。ただ、東栄町のかたをみていると、「そもそも親が自然の中で遊んでいない」。今の親世代は、「東栄町は何もないから、外で遊びたいという世代」。

森のようちえんも、設楽町、豊根村からの参加に比べて、東栄町のかたの参加は少ない。自分たちの広報の仕方もあるのかもしれないが、お金をかけてまで参加できないという人もいた。敢えて外で遊びたいという人が少ないように感じる。ただ、川ではみんな遊ぶ。小学校が指定した遊泳場所があって、夏になると親が順番で見守りをするのはこのいいところだと思う。

町内で小さな子どもを連れて入れる森が、のき山学校の裏ぐらいしかない。山も私有地

が多く、勝手には入れない。町内には、振草の小さい公園くらいで、（自然豊かな）公園はない。町内に唯一の保育園が新しくできたが、「園庭に（遊べる）木が一本もない」。子育て支援センターも、年に1、2回散歩があるくらいか。

行政は（自然の豊かさを子育て支援や教育にいかすことに）重きをおいていない。（自然のいかしかたを）知らないのか、敢えて（自然のよさを）推そうとっていないようだ。自然が身近過ぎて、行政としてわざわざやらなくてもよいと思っているのかもしれない。実は都会の方が選択肢が多い。自然を取り入れたり、こだわった保育園や教育施設、遊び場がいろいろある。「岡崎の方がよっぽど自然豊かなところで遊べる」。

これらの話の論点は、以下の3点に集約できる。

- 1 現在の親世代は東栄町の自然の中で十分に遊べておらず、また身近な自然に価値を感じていないのではないか
- 2 東栄町内には豊かな自然があるにも関わらず、子どもが自然と関わって遊べる場所が限られているのではないか
- 3 自然の豊かさが子どもに関わる施設やそこで行われる事業の中に積極的にいかされていないのではないか

今回の調査で、1に関しては十分な情報を得ることはできなかったが、「2 東栄町内には豊かな自然があるにも関わらず、子どもが自然と関わって遊べる場所が限られているのではないか」「3 自然の豊かさが子どもに関わる施設やそこで行われる事業の中に積極的にいかされていないのではないか」という点に関しては、一部ではあるが状況を知る手がかりを得ることができたので、かなり限定的であることを承知の上で、得られた情報から考えられる可能性について考察を行った。

東栄町内には豊かな自然があるにも関わらず、子どもが自然と関わって遊べる場所が限られているのではないか

この点については、他の調査協力者に町内における子ども達の遊び場を尋ねた際も、自然の中の遊び場というよりは、整備された遊び場が数か所挙げられるのみで、限定的な印象を受けた。

例えば、子育て情報の窓口的存在であったと思われる東栄町役場住民福祉課職員の話の中で、親子が利用できる町内の遊び場として挙げられていたのは、子育て支援センター、とうえい保育園の園庭開放、のき山学校の3か所のみであって、そのため、町外にある新城総合公園（新城市）や私設公園である「きのこの森」（設楽町）も挙げられていた。前述の調査協力者によると、この「きのこの森」は、「遊び場がないなら俺たちが作った」と民間の方の有志でつくられた遊び場とのことである。

また、東栄町出身のとうえい健康の館男性職員からは、自身の幼少期の遊び場として、旧東栄町立下川小学校（現のき山学校）の裏山にあった「のき山ランド」や「お墓のところの上にあった広場」が挙げられており、最近の子ども達の遊び場としては、のき山学校や「川の遊歩道」（おそらく大千瀬川のホテルの散歩道）が挙げられるのみであった。「のき山ランド」は、小学校の裏山の簡易フィールドアスレチックがあった場所のことで、自

然の中で遊べるような場所であったようだが、現在はそのような状態ではなく、「のき山ランド」を復活させようと計画が実行中とのことである（NP0 法人てへほ）。

前述のご夫婦を含め4名の調査協力者の方々が、町内にある遊び場をこのように説明した各々の背景には、各調査協力者自身の「遊び」や「遊び場」の捉え方、つまりどういった活動を子どもにとっての遊びと捉え、どういった場所を遊び場と捉えていたかということが影響を与えていたと考えられる。

例えば、前述のご夫婦であれば、ご主人には、東栄町に移住する以前に、自然体験学校でアウトドアスキルを教えていた経験と、サドベリースクールで子ども達と関わってきた経験があり、子ども達にとって自然と関わる経験が重要であることが理解されていた。その上で東栄町を選んで移住してきた経緯があるにもかかわらず、現在親として東栄町で子育てをする中で、豊かな自然が身近にあるにもかかわらず、実際には子ども達が自然と関われる場が限られていることや周りとの価値観の違いから憤りが生じ、「町内で小さな子どもを連れて入れる森が、のき山学校の裏ぐらいいかない」「岡崎の方がよっぽど自然豊かなところで遊べる」という語りにつながったと考えられた。

また、そもそも、町内の子育て世帯の家庭環境として、例えば家の敷地内など身近な場所に豊かな自然があるということであれば、改めて町として自然と関われるような「遊び場」を設ける必要がない可能性も考えられた。

そのため、実際のフィールドでの観察や聞き取り調査が重要であったわけだが、今回の限られたフィールド調査においては、地元の子ども達や親子になかなか出会うことができず、子ども達が戸外で遊んでいる様子や遊び場を観察したり、そこで親子に聞き取り調査を実施するまでには至らなかったため、これ以上詳細な情報を得ることができなかった。

ただ、一方で、この「子どもが自然と関わって遊べる場所が限られているのではないか」という点に関して、他の調査協力者から、自然の中で遊ぶことの危険性やその際の大人の付き添いの必要性についての話も聞かれ、それらが影響を与えている可能性も示唆された。

とうえい健康の館女性職員からは「今は山に（子どもを）行かせん。ヒルやイノシシ、熊が出る。一人では絶対行かせん」との話が聞かれ、下田在住の男性からは「（山に行くのに）子ども一人では危ない。案内人が一緒ならいいけど、どっちに行くかわからなくなる」との話が聞かれた。

また、この男性からは、自分の子ども達が小さい頃は、子どもが溺れるといけないので、近所の3軒で順番に親が川に立ち、子ども達を川で遊ばせていたとの話も聞かれた。前述したように、現在でも夏の川遊びでは学校の指定した遊泳場所に親が順番に立ち、その中で子ども達が遊ぶようになっているとのことであった。

実際、今回の調査で観察を行った場所においても、子ども達が自然と関われる場としてとても魅力的な箇所も多かった反面、慣れない者が子ども達を連れて遊ぼうとした場合に、勝手に入ってもいい場所なのか、入って行って危なくないのかなど、躊躇したり不安になるような場所も多く、自然の危険性や案内人や付添人の必要性を感じた場面も多かった（写真⑳㉑㉒㉓㉔）。



㉓川の危険を知らせる看板 ㉔慣れないと怖い階段 ㉕降りてよいか迷った大千瀬川の階段 ㉖階段を降りた先の茂み

以上のことから、東栄町内には豊かな自然があるにも関わらず、子どもが自然と関わって遊べる場所が限られている可能性が示唆され、特にその理由として、公共の森が少ないことや自然の中で遊べるように整備された場所が少ないという物理的な条件だけでなく、子ども達が自然に関わって遊べるように、そこに案内し、付き添い、そして見守る大人の存在という人的条件によっても制約を受けている可能性が示唆された。

そのため、後述の小学校の自然体験の取組のように、東栄町の自然をよく知る大人が子ども達に関わることは、東栄町の自然と子ども達をつなぐ重要な役割を担っていると考えられた。

また、前述のご夫婦や、フジバカマにアサギマダラが飛来する環境を「とっても恵まれている」と表現した名古屋市からの移住者であり元保育士でもあった調査協力者のように、東栄町の自然の価値を理解している人々の存在も鍵になると考えられ、今後は両者が協働することによって、東栄町の豊かな自然をいかしたさらに面白い取り組みが生まれるのではないかと期待された。

自然の豊かさが子どもに関わる施設やそこで行われる事業の中に積極的にいかされていないのではないか

前述のご夫婦からは、町内に小さな子どもを連れて入れる森が限られていること、新しくできた保育園には園庭に遊べる木が一本もないこと、都会の方が自然と関わって遊べる環境が整っていることが語られてた。

実際、保育園の園庭や小学校の校庭には外構としての植栽は行われていたが、その外観からは積極的に自然が取り入れられている様子は確認できなかった（写真㉗㉘㉙㉚）。むしろ、保育園の園庭にしても、小学校の校庭にしても、それぞれの境界によって広い空地が確保されている様子は、間近に迫る自然の中で、子ども達だけでも行ける場所、子ども達だけでも安心して遊べる場所を確保しようとしているような、そんな印象を受けた。



㉗保育園の園庭



㉘保育園の園庭



㉙小学校の校庭



㉚小学校の校庭

一方、東栄小学校ブログをみていくと、年間行事としては、東栄町の自然環境や資源を

利用した自然体験がいくつか取り入れられており、令和3年度であれば、漁協の協力による鮎釣り体験、「Jomomさんがやってきた参加型プロジェクト」特別授業石斧体験、大千瀬川水質調査と水遊び（5年生）、木の駅プロジェクト間伐材搬出体験（4年生）、木の駅実行委員会木育体験活動（4年生）が行われていた（東栄小学校HP）。また、園舎や校舎は東栄町産材を使用するなど、生活の中で木のぬくもりを感じられるような環境となっていた（とうえい保育園、木材利用の促進事例集）。

しかし、近年注目されている、プレイパークや森のようちえん、自然保育でおこなわれているような、体や五感をフルに活用して自然と関わりながら過ごす経験は、通常の園生活や学校生活においては、日常的には難しいのではないかと推測された。

つまり、東栄町の子ども達は、自然が身近にある分、自然を「感じる」経験や自然を「知る」経験は多くあるものの、日常的に自然と「関わる」経験は他地域と比べてそこまで多くないのではないかと想像された。

この点に関しては、都市部だけでなく地方や田舎においても自然離れが進んでいるという指摘もされており（北村・蒔田 2021）、さらには、そういった子ども達の自然離れに影響を与える要因として、実は、学校周辺の自然度の高さとともに、特に子どもの自然に対する関心の高さや子どもの自然遊びに対する保護者の態度が影響を与えているとする研究（大学プレスセンター 2018）や、子どもの自然体験の機会の喪失に加えて、保護者の経験不足が影響を与えていると指摘する研究（北村・蒔田 2021）、そして、幼少期の子どもの遊びに親の遊びの嗜好性や養育姿勢が反映されるとする文献（嶋崎 2010：31）もある。

そのため、東栄町においても、前述の調査協力者のご夫婦が「親が自然の中で遊んでいない」「敢えて外で遊びたいという人が少ないように感じる」と指摘していたように、実際に、親世代の自然体験が少なく、自然体験の大切さを感じていないということであれば、上述の物理的・人的環境面の整備だけでなく、自然体験を促すための親世代も含めた働きかけも検討していく必要もあるのではないかと考えられた。

（２）地域におけるつながりの実際

今回の調査によって、東栄町においては、子育て世代が地域におけるつながりを広げていく経緯として、①子育て支援施設・教育施設の利用による子育て世代同士のつながりの形成、②地元のお祭りや集まりへの参加による地区内でのつながりの形成、③周りから子育て世帯への興味・関心による受動的なつながりの形成の3つの経緯を見い出すことができた。

①子育て支援施設・教育施設の利用による子育て世代同士のつながりの形成

子育ての現状でも述べたように、東栄町では、市内に一か所ずつある子育て支援施設や教育施設に、町内すべての同世代の子どもとその親が集まるために、そこを利用することが、子育て世帯同士のつながりを形成する上で、重要な役割を担っていることが推測された。

前述の調査協力者も「子育て支援センターでお母さん同士の繋がりができた」と話されていたように、出生数や年少人口が少なく、また急峻な地形で子連れでは車での移動が多くなると考えられる東栄町においては、ただ子どもを連れて近所を散歩するだけでは、子育て世代同士が偶然出会うことは、都市部よりも更に難しいと考えられたため、そういった施設の役割がより大きいのではないかと推測された。

実際にフィールドを徒歩で移動する中でも、調査協力者の方々が「(園庭開放といっても)子どもいるかな?」「この時期だとうちぐらしか川に遊びに行かない」「外で遊び回っている子どもをみない」と話されていたように、とても天気の良い日であったにもかかわらず、戸外で遊ぶ子どもや親子を見かけたのは、小学校の校庭でブランコをする一組の親子のみで、それ以外は、調査協力者の子ども達と、途中に立ち寄ったスーパーの駐車場、花祭り会館内、とうえい温泉内で子ども達を見かけたただけであったため、そういった施設の重要性をより実感をもって理解することができた。

ただし、子育て中の親にとって、「子ども中心型」ネットワークだけでは対人関係に起因するストレスが相対的に大きくなるとの指摘がされていたり(前田 2018: 95)、また、育児中のストレスに対処するためには、子育てだけでなく、親「自身の成長を促す」視点も必要であるとの指摘もある(宮本 2008: 735)。

そのため、前述の調査協力者のご主人が「消防団に入ったことも大きい。39歳以下の方が対象だが、入っていなかったら同世代の友達はできていないと思う」と話されていたように、高齢化が進み、青年期や初期成人期にある人同士のつながりが自然にはできにくいと考えられる東栄町においては、時には、消防団のような活動等への参加も、子育て中の親が育児ネットワークに限らない多様なつながりを地域で広げ、親としての自分とそれ以外の自分のバランスを保っていく上では、重要な役割を担っていることが推測された。

②地元のお祭りや集まりへの参加による地区内でのつながりの形成

東栄町においては、花祭りをはじめとした各地区のお祭りや地区の集まりに参加することが、子育て世帯の地区内におけるつながりの形成に重要な役割を担っていることが推測された。これに関して、前述のご夫婦も以下のように話されていた。

ここの組長さんがとてもいい人で、移住してきた際に、一緒に地区内の家を一軒ずつあいさつに回った。ここの地域はとても「ウェルカム感」があって、歓迎会を開いてくれた。神社のお祭りで準備などを手伝ううちに、さらに地域の人に顔を知ってもらった。

同じ地区に住んでいる、一人暮らしの70代のおばさんのところに子どもを連れてよく遊びに行っている。組の集まりに参加するうちに、顔見知りになり遊びにおいでと言われて、遊びに行くようになった。

また、とうえい健康の館女性職員も、地区の付き合いとして、道づくり(道路清掃)や花祭りに出なければならぬが、そこに参加することで地区の人達に顔を知ってもらうよい機会になると話されていた。

東栄町振興課職員の話では、地区によっては花祭りへの参加が移住の条件にもなっているとのことで、このように地区活動への参加が必須である分、その負担も大きい可能性はあるものの、お祭りの準備や様々な活動を通して、同じ地区の人々と必然的に顔を合わせるが多くなることで、元々東栄町に繋がりがなかった子育て世帯にとっては、地域の中でつながりを広げていくよいきっかけとなっていることが推測された。

近年、地縁的なつながりの希薄化が問題視され、多世代交流施設やコミュニティカフェ、こども食堂といった新たな取組の広がりによって解決策が模索されている中で、東栄町においては、花祭りをはじめとして各地区で引き継がれてきたお祭りやしきたりが、地縁的

なつながりを広げていく仕組みとして重要な役割を担っていることが推測された。

③周りから子育て世帯への興味・関心による受動的なつながりの形成

移住してくると、みんなが気にしてくれる。「(自分たちのことが)わりと知られちゃうんだよね」。家の前の道路を人が良く通るので、家を直していると声を掛けてくれる。田んぼの作業をしている際も、近所の人が「お、ちゃんとできとるじゃん」と声を掛けてくれる。

このように、前述の調査協力者のご夫婦も話されていたように、東栄町では、「子ども」や「若い人」を地域の人々が気に掛け、話しかけてくれるような風土があり、今回の調査の中でも実際にそれを感じられるエピソードや体験が度々あった。

例えば、今回、未就学児の息子と共にフィールド調査を行っていたまちプロスタッフの話によると、町内を散策していた際、児がサンダルを履いているのを見て、「うちの子も草履履いてるわ」と声を掛けられたり、3人の高齢女性が縁側で話をしている前を通りかかった際には、おいでと呼び止められ、1人ずつ握手を求められたとのことであった。

また、筆者自身、町内を徒歩で移動中に、調査協力者となった下田の男性に、「話していかんかい」と声を掛けられ、玄関先の椅子に座って話を聞く機会を得たり、バスを利用した際も「駅に行くんだら」と声を掛けられる場面もあった。

一方で、徒歩で町内を移動していた際、周りの環境があまりに静かであったため、その分どこかから聞こえてくる子どもの声が、辺り一面に響き渡っていたことがあり、地域の人々にはこのように「子ども」や「若者」が際立ってみえているんだと理解する場面もあった。

このような地域性を、前述のご夫婦のように「私たちは気に掛けてもらえることが嬉しいから(助かっている)」と捉えられる人においては、周りからの様々な働きかけがきっかけとなって、地域におけるつながりが生まれ、子育てのしやすさに繋がっていると推測された。

以上にみてきたような経緯で、子育て世帯が地域における多様なつながりを形成していくことは、東栄町で子育てをする強みとなっている可能性が示唆された。

ただし、全ての人がこのような状況をうまく活用できるとは限らないことも考慮する必要があると考える。

例えば、東栄町振興課職員の話によると、移住者の中には、「挨拶をしない」「連絡が取れない」「ありがとうと言わない」と地元の人とトラブルになるケースがあったり、東栄町の人々の「世話を焼きたがったり、若い人に何かしたくて仕方がない」という姿勢に戸惑いを抱く人もいるという。

また、その一方で、未就学の子どもをもつ親の中には、緊急時や用事がある時であっても子どもを預けられる人が身近にいないという人が存在していることから、助けてほしい気持ちと助けてあげたい気持ちの行き違いが生じている可能性もあり、この点については、第2期東栄町子ども・子育て支援事業計画の目標事業として掲げられているファミリー・サポート・センターの設置とともに、今後検討が必要な点であるといえる。

さらに、子育て支援センターの利用に関しても、子どもが小さい時ほど、子育て支援施

設までの距離が利用のしやすさに与える影響は大きく、子育て支援センターが市内に一か所しかないことや、子育て支援センターを利用していない人が5割を超えていることを踏まえると、施設を利用しづらい人々が地域で孤立しないために、東栄町の人々の人柄や地域性をいかした仕組みづくりを考える必要があるのではないかと考えられた。

5. まとめ

本調査では、筆者の個人的な立場でもある「子育て中の親」の視点で町内の観察を行い、東栄町の地域性を実際に体感しながら、「『地縁』『自然』という東栄町の豊かさは子育てにいかされているのか」という問いを基に、探索的にフィールド調査を実施した。

その結果、限られた情報からではあるが、東栄町における遊び環境や地域におけるつながりに関するいくつかの示唆を得ることができた。

まず、子どもの遊び環境に関して、東栄町には、豊かな自然が存在していることが確認されたが、調査協力者の方々の話や町内の観察から、子ども達が自然と関わって遊べる場所が限られてる可能性が示唆され、その理由として、物理的な条件による制約だけでなく人的条件による制約を受けている可能性が考えられた。

そのため、環境の整備だけでなく、東栄町の自然をよく知る大人の役割が重要であり、また東栄町の自然の価値を理解している人々の存在も鍵となると考えられ、両者の協働によって、東栄町の豊かな自然をいかしたさらに面白い取り組みが生まれていくのではないかと期待された。

また、東栄町の自然の豊かさが、子どもに関わる施設やその事業に積極的にいかされていないのではないかとこの点については、いくつかの自然環境や資源を活用した取り組みはみられたものの、それらは自然を「感じる」経験や自然を「知る」経験が多く、日常的に自然と「関わる」経験は他地域と比べてそこまで多くはない可能性が示唆された。

そのため、東栄町においても、物理的・人的環境の整備とともに、自然体験を促すための親世代も含めた働きかけも検討していく必要があるのではないかと考えられた。

次に、地域のつながりに関しては、東栄町において、子育て世代が地域の中でつながりを広げる経緯として、①子育て支援施設や教育施設の利用による子育て世代同士のつながりの形成、②地元のお祭りや集まりへの参加による地区内でのつながりの形成、③周りから子育て世帯への興味・関心による受動的なつながりの形成の3つを見出すことができた。

これらによって、子育て世帯が多様なつながりを形成していくことは、東栄町で子育てをする強みとなっている可能性が示唆された。

しかし、一方で、全ての人がこのような状況をうまく活用できているとは限らないことも考慮する必要があり、子育て世帯を孤立させないために、東栄町の人々の人柄や地域性をいかした仕組みづくりの必要性が示唆された。

最後に、近年、「福祉のまちづくり」から「福祉でまちづくり」への視点の転換が言われるようになっている。その中で、子育て支援に関しても、地域の様々な主体が子どもや子育てに関わることで、地域の活性化に繋がっている事例もある。

例えば、千葉県柏市では、「地縁のたまご」プロジェクトという名の下に、退職後の高齢者が地域の子ども達（たまご＝他孫）に積極的に関わることで、地域の中に多世代型コミュニティが生まれ、「子育てに優しい地域と評判に」なったことで、人口増につながっている（牧野 2017：125-42）。

また、長野県佐久穂町にある大日向小学校は、日本で初めてイェナプランを採用して創

設された学校で、佐久穂町の自然豊かな環境と地域の人達との交流を教育の中に積極的に取り入れることで、地域コミュニティの中心的役割を担っているが、その方針に賛同し移住してくる人も多く、2021年6月時点では、全校生徒136人のうち104人が移住者であるという（TURNS、PRESIDENT Online）。

このように、地域として子どもや子育てに積極的に関わることは、地域活性化の鍵となり得る。東栄町には、「自然」「地縁」という強みがある。それらと地域に暮らす様々な主体とをうまく組み合わせることで、その可能性は広がっていくと考えられる。

引用文献

文部科学省（2005）「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について（答申）はじめに」

（https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/05013102.htm,2022.1.14）

宇都宮森和・鍛冶梁みつ子・岸野祥江・ほか（2021）「園の自然環境を保育に生かすことで子どもの遊びを学びに高める取組」岡崎女子大学・岡崎短期大学『子ども好適空間研究』第3号,13-22

学校法人茂来学園・大日向小学校・大日向中学校

（<https://www.jenaplanschool.ac.jp/>,2022.1.14）

長野県「信州やまほいく（信州型自然保育）」

（<https://www.pref.nagano.lg.jp/kodomo-katei/kyoiku/kodomo/shisaku/shizenhoiku-nintaiseido.html>,2022.1.14）

鳥取県「森と自然と子育てに関すること」

（<https://www.pref.tottori.lg.jp/279828.htm>,2022.1.14）

広島県「ひろしま自然保育認証制度について」

（<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/244/shizenhoiku.html>,2022.1.14）

滋賀県「しが自然保育認定制度」

（<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/shinrinhozen/310874.html>,2022.1.14）

山梨県「自然保育導入推進事業」

（<https://www.pref.yamanashi.jp/kosodate/shizenhoiku/shizenhoiku.html>,2022.1.14）

東栄町「第2期東栄町子ども・子育て支援事業計画（令和2年度～令和6年度）」

（<http://www.town.toei.aichi.jp/secure/4076/dai2kitoeichokodomokosodatekeikaku.pdf>,2022.1.14）

東栄町ホームページ「東栄町の概要」（<http://www.town.toei.aichi.jp/1095.htm>,2022.1.15）

東栄町ホームページ「人口・世帯」

（<http://www.town.toei.aichi.jp/item/1152.htm#itemid1152>,2022.1.15）

NPO法人てへほ「のき山学校」（<https://tehohe.com/nokiyama/>,2022.1.21）

東栄小学校（<http://www.kitashitara.jp/toei-el/>,2022.1.22）

とうえい保育園（<https://www.pref.aichi.jp/uploaded/attachment/399908.pdf>,2022.1.21）

木材利用の促進事例集

（<https://www.rinya.maff.go.jp/chubu/nagoya/mokuzai/pdf/mokuzaisokusin2016-3nagoya3.pdf>,2022.1.21）

北村芽唯・蒔田明史（2021）「子どもの自然離れの実態と要因～地域環境と親子関係に着目して～」『第132回日本森林学会大会学術講演集原稿』

大学プレスセンター「白鷗大学教育学部の山野井准教授らの研究チームが『子供の自然離れ』について調査—子供と親の興味関心が影響」

(<https://www.u-presscenter.jp/article/post-40476.html>,2022.1.23)

嶋崎博嗣（2010）「子どもの遊び環境」林邦雄・谷田貝公昭監修『子ども学講座3子どもと環境』一藝社、27-42

前田尚子（2018）「親族・友人・地域の育児ネットワーク」日本家政学会編『現代家族を読み解く12章』丸善出版、94-5

宮本政子（2008）「乳幼児を養育する母親及び父親の育児支援に関する研究—育児ストレス構造の特徴と対処行動との関連」財団法人日本小児保健協会『小児保健』67(5)、729-37

牧野篤（2017）「『つくる生活』がおもしろい 小さなことから始まる地域おこし、まちづくり」さくら舎

TURNIS「『人と地域のハブになる』学校づくり長野県・佐久穂町 学校は地域と一緒につくるもの。自然豊かな佐久穂町で生まれた大日向小学校」

(<https://turnis.jp/36954>,2022.1.23)

PRESIDENT Online「『生徒の76%が移住者』入学希望が殺到する”長野県の小学校”の授業内容 選択は『近場の学校』だけじゃない」

(<https://president.jp/articles/-/48351?page=3>,2022.1.23)

【授業の目的・目標】

愛知県北設楽郡東栄町を題材として具体的に検討します。住民や NGO が中心になって取り組むまちづくりに焦点をあて、地域の伝統を守りながらもよそ者を受け入れて進行・拡大する地域づくりのありかたについて考えていきます。

【学習到達目標】

- 1) 地域づくりをめぐる前提となる議論を理解する。
- 2) 地域づくりの諸事例に通じるようになる。
- 3) 地域づくりにおける社会調査の意義について、その手法実践の基礎を学ぶ。

【キーワード】

住民参加、NGO、地域再生、地域おこし、地域づくり、村づくり、フィールドワーク

【成績判定方法】

事前学習への取り組み 30%、現地調査実習への取り組み 40%、事後原稿の作成・編集への取り組み 30%

【報告書】

自身でフィールドワークの課題を設定して論じてください（迷う場合は相談してください）。東栄町に特化してもしなくてもよいですが、東栄町に特化しない場合も東栄町での現地訪（場合によってはオンライン・フィールドワーク）を踏まえてください（たとえば、東栄町と他の自治体との比較など）。自身の研究テーマにひきつけられる人は関連づけて構いません。この課題が自身の卒論・修論・博論執筆の一部となるなら、なお良いと思います。

報告書字数は **4000 字程度**（A4 用紙、書式は自由）、締め切りは **12 月 17 日（金）17:00**、PDF ファイルによるメール添付での提出とします。

なお、本報告書をまとめたものを簡易製本して、受講者にも 1 部配布します。東栄町関係者にもお渡しする予定なのでご承知おきください。

【授業日程と各回の内容】

説明会：2021 年 9 月 24 日（金）4 限

《課題》10 月 8 日の初回授業までに、東栄町のホームページを調べて、自分が行いたいフィールドワークの関心に引きつけてまとめてください（観光事業とか、林業とか、子育て支援など、切り口はご自由に）。<http://www.town.toei.aichi.jp/>

歴史や古文書に興味がある人なら、ホームページ情報ではなく、図書館や公文書館で東栄町史を調べてくるなどでも構いません。

あるいは日本全体の動向に興味があるなら、総務省の地方創生ネタでも構いません。

初回授業で各自 10 分程度で発表します。

第 1 回～第 2 回：10 月 8 日（金）3-4 限

- ・イントロダクション：授業計画の説明
- ・東栄町の基礎資料（歴史・産業・人口動態）の検討
- ・学生による課題発表

第3回～第4回：10月9日（土）1-2限

- ・総務省の地方創生施策の検討
- ・学生による課題発表（つづき）
- ・丹羽貴裕（愛知県職員）ゲスト講演「東栄町の総合戦略」——東栄町がなぜ人口が減ったのか、その課題の状況は、そしてどのように解決に向けて動いているのか、その考え方と実証実験の結果について

第5回～第6回：10月22日（金）3-4限

- ・まちプロ担当回

第7回～第8回：11月5日（金）3-4限

- ・現地調査のプランニング
- ・調査手法のトレーニング

第9回～第13回（現地）：11月12日（金）～14日（日）

滞在日程は、11月13日（土）をコア日として、12日～13日、13日～14日のいずれか、各自の希望や都合でお決めください。もちろん、2泊3日でも構いません。宿泊は体験型ゲストハウス「danon だのん」を仮予約してあります（1泊2食で7,000円程度）。

この日程にどうしても都合の合わない院生の履修も認めます。その場合は、自身で日程を設定して現地訪問してください。なお現地へは必ず公共交通機関をご利用ください（大学の安全管理上の問題があります）。費用もすべて自弁をお願いします。

第14回～第15回：11月26日（金）3-4限

- ・調査データの整理
- ・データ整理から得られる知見の抽出

第16回～第17回：12月10日（金）3-4限

- ・まとめ
- ・研修報告冊子の編集
- ・研修報告冊子印刷・配布

【参考資料・文献】

- ・東栄町誌編集委員会編 2001年『東栄町誌』東栄町。
- ・味岡伸太郎 2000年『神々の里の形：愛知県北設楽郡東栄町古戸の花祭りより』グラフィック社。
- ・田中輝美 2017年『よそ者と創る新しい農山村』筑波書房。
- ・田中輝美 2017年『関係人口を作る：定住でも交流でもないローカルイノベーション』木楽社。
- ・柳田國男 1929年『都市と農村 朝日常識講座第六巻』朝日新聞社発行。
- ・和田信明、中田豊一 2010年『途上国の人びととの話し方：国際協力メタファシリテーションの技法』みずのわ出版。
- ・中田豊一 2015年『対話型ファシリテーションの手ほどき：国際協力から日々の生活まで、人間関係をより良いものにするための方法論』認定NPO法人ムラのミライ。
- ・宮本常一・安溪遊地 2008年『調査されるという迷惑：フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版。

【関連イベント】

■□その他

東栄町 HP

<http://www.town.toei.aichi.jp/>

体験型ゲストハウス danon

<https://danon-toei.com/>

(参考)

- ・豊川水系と天竜川水系の分水嶺。この峠を越えて見える重畳の山並み。ここが、「花祭りの里 東栄町」です。[東栄町 HP>町の紹介>東栄町の概要 より]
- ・東栄町は南信と遠州に隣接する山間地帯の人口約 3400 人の小さな町 [体験型ゲストハウス danon ホームページより]



<http://www.town.toei.aichi.jp/1098.htm>

愛知県北設楽郡

東栄町で

フィールドワーク！

行ってみよう！
地域を知ろう！

(集中講義)人間文化研究F/国内フィールドワークB:東栄町のまちづくり

事前説明会

日時：9月24日(金)
4限(14:40)～

場所：1-204(基本対面ですが、ZOOM参加も可能です)

関心のある学生は、榎木(enoki@hum.nagoya-cu.ac.jp)までメールをください。教室参加者は直接会場に来てください。zoom参加希望者にはミーティングIDをお送りします。

内容：

- ・フィールドワークの
日程、予算、授業の内容の説明
- ・東栄町移住者や東栄町の方との
交流も予定しています！

※東栄町へ行く日程は
11月12日(金)～11月14日(日)です。

人文社会学部国際文化学科の展開科目Dを未履修の3年生を優先します。
人数のあいた限りにおいては、他学科学生の履修も大歓迎です。
人数が多い場合は選考となります(最大人数は20名)。
教員が一括して履修登録しますので履修登録期間の正規の履修登録は必要ありません。

担当教員：榎木
enoki@hum.nagoya-cu.ac.jp

執筆者紹介（執筆順）2021年10月現在

石井友香（いしい・ゆか）	名古屋市立大学人文社会学部心理教育学科4年
杉山斗優子（すぎやま・とうこ）	名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科2年
轡田ゆうか（くつわだ・ゆうか）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
野口美有（のぐち・みゆ）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
三品美咲（みしな・みさき）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
山田輝子（やまだ・きこ）	名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科2年
吉野大志（よしの・たいし）	名古屋市立大学人文社会学部現代社会学科4年
吉田祐治（よしだ・ゆうじ）	名古屋市立大学人間文化研究科博士前期課程
* 榎木美樹（えのき・みき）	名古屋市立大学人間文化研究科准教授

*は編者

愛知県北設楽郡東栄町のまちづくり

2021年度名古屋市立大学大学院人間文化研究科「人間文化研究F」
／人文社会学部「国内フィールドワークB」実習報告書

榎木美樹編
2022年3月
